第２章

事業の実施

1 コース・ディスカッション（CD）

コース・ディスカッション（CD）とは、各国のPYが、希望に基づきコースに分かれ、ファシリテーターの指導の下に行われるディスカッション・プログラムである。PYは、SDGs（Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標）を共通テーマとした10個のそれぞれ異なったアカデミックなコース・ディスカッションに取り組んだ。PYはCDを通して各テーマの実情について理解を深め、課題解決の糸口を探った。また、PYが率直かつ活発な意見交換を通じ、相互理解の促進、文化の異なる集団の中でのコミュニケーション能力を身に付けることも目的とした。

コース・ディスカッションの主な流れは、以下の通りである。

(1) 令和５年11月４日（土）、５日（日）、11日（土）、12日（日）、25日（土）、26日（日）：オンライン交流
- CD　１時間45分×３コマ（参加国は、時差により２つに分かれる。）

(2) 令和６年１月30日（火）～２月９日（金）：船上プログラム
- CD　２時間×４コマ
- 事後活動セッション（全体会）１時間（ファシリテーターが事業参加経験をいかした事後活動を紹介すると共に、PYが事業終了後に社会活動を行う際の知識やスキルを学ぶためのセッション）

(3) 令和６年２月10日（土）～２月17日（土）：地域実践活動
- 各コースに即した高知県内の関連施設訪問
- ローカル・ユースや有識者等と意見交換
- 地域実践活動での学びや高知県が抱える課題に対する改善策等の成果発表（８分×10コース）

(4) 令和６年２月18日（日）～20日（火）：船上プログラム
- 振り返り
- サマリー・フォーラム準備
- サマリー・フォーラム（10分×10コース）

ファシリテーター

コース・ディスカッション	氏名	国名
① ジェンダー平等	Ms. Jocelyn Teo	シンガポール
② 共生社会の実現	Ms. Lillian Solheim	ノルウェー
③ 質の高い教育の提供	Ms. Nitika Ennion	ニュージーランド
④ 青少年のエンパワーメント	Mr. Berzenn Urbi	オーストラリア
⑤ 地域の伝統と歴史の継承	Ms. Priscilla Madrid Valero	メキシコ
⑥ 魅力あるまちづくり	Ms. Pannaritsara Chuenjitrabhiramon	タイ
⑦ 防災教育とツーリズム	Ms. Samantha Javier	フィリピン
⑧ 防災対策	Mr. Gerardo Castañeda Garza	メキシコ
⑨ 環境保護と観光	Mr. Maximiliano Montoya González	メキシコ
⑩ 自然と寄り添う暮らし	Mr. Ivan Vichr Nisida	ブラジル

1.1. コース・ディスカッション・レポート

CD-01 ジェンダー平等

ファシリテーター: Ms. Jocelyn Teo

(1) ディスカッションの目的とねらい

a. PYがSDGs目標５（ジェンダー平等）及び目標８（ディーセント・ワークと経済成長）についてより深く学ぶことができるようにする。
b. PYは、自国や世界におけるジェンダー平等、尊重、雇用機会均等を促進するためのプログラムについて学ぶ。
c. 男女問わず、全ての人が、女子・女性をエンパワーメントし、その地位を高めるために果たすべき役割があると認識するような促しをPYに対して行う。
d. PYは、自国でジェンダー平等を提唱するための具体的な行動計画を立てる。

(2) 事前課題

a. PYは、自国におけるジェンダー平等と経済的エンパワーメントに関する主要問題、現在の取組と成功事例、主な利害関係者、国の行動計画について振り返った。
b. PYは、SDGsと国連の「持続可能な開発のための2030アジェンダ」及び「青少年のための女子差別撤廃条約」について学んだ。

(3) 活動内容

A. オンライン交流

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. SDGs目標５と８の紹介とその重要性
b. 「ジェンダー平等」「尊重」「ディーセント・ワーク」の主要概念の定義
c. 「ジェンダー平等」と「ディーセント・ワーク」とはどのようなものか？

活動

a. 写真と面白い事実を用いたPYによる自己紹介
b. PYは、自らにとって「ジェンダー平等」「尊重」「ディーセント・ワーク」「経済成長」の意味が何かを発表した。

成果

a. PYは、同じタイムゾーンに属するCDの仲間についてよりよく知ることができた。
b. PYは、SDGs目標５と８について理解を深め、それが自分たちの生活にどのように関わるか理解した。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

自国におけるジェンダー平等と経済的エンパワーメントに関する喫緊の課題を理解する。

活動

a. PYは、Padletを使って、ジェンダー平等に関するその国特有の懸念（ジェンダーに対する固定観念、フェミサイド、女性器切除、教育、医療、労働機会、技術への平等なアクセス、女性の権利保護のための法的枠組みの必要性など）について話し合った。
b. SWOT分析（強み、弱み、機会、脅威）に関する研修
c. PYは、SWOT分析を用いて、国レベルでのジェンダー平等と経済的エンパワーメントに関する取組を奨励するにあたっての理想と現実、及び成功事例について話し合った。

成果

PYは、それぞれの国におけるジェンダー平等と経済的エンパワーメントに向けた成功事例及び課題について学んだ。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

a. ジェンダー平等と経済的エンパワーメントを取り巻く世界の現況を概説する。
b. 職場でのジェンダー平等及び機会均等を目指す国際機関の活動について理解する。

活動

a. 自分と異なるタイムゾーンに属するグループに関し、Padletを用いてバーチャルギャラリーウォークを行う。
b. ジェンダー平等とディーセント・ワークと経済成長の機会を促進するための、世界の成功事例と国際機関の役割、国連の活動について議論する。

成果

PYは、ジェンダー平等と経済的エンパワーメントの問題に取り組む際の国際的な課題と成功事例について理解を深めた。

B. 船上プログラム

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. オンライン・セッションからジェンダー平等と経済的エンパワーメントについて学んだことを行動に移す。
b. 船上においてジェンダー平等の旗振り役となるスキルを身につける。

活動

a. オンライン・セッションの振り返り

b. 対面でのアイスブレイク
c. リサイクル材料を用いてジェンダー平等と経済的エンパワーメントが自分たちにとってどのような意味を持つかを彫刻で表し、健康的な船上生活を呼びかける際や自主活動の中で話のきっかけとして使う。

成果

a. ２種類のタイムゾーン・グループのPY同士で、互いをよりよく知ることができた。
b. PYは、オンライン・セッションで学んだことを統合し、ジェンダー平等と経済的エンパワーメントが自分たちにとってどのような意味を持つかを語る彫刻を制作した。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

高知県民から寄せられた現実的な問題の解決策をブレインストーミングする。

活動

a. 日本の女性政治家を増やすにはどうしたらよいか、高知県の公立高校で女性校長の割合を増やすにはどうしたらよいか、男女共同参画を推進するための効果的な法的手段や意識など、高知県民が投げかけた疑問について議論する。
b. PYは３つのグループに分かれ、ジェンダーについての質問に対してより深く取り組み、課題についてギャラリー・ウォークを行う。

成果

PYたちは様々な解決策を提案し、高知県民に提示した。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

a. SMARTゴールについて学ぶ。
b. PYと香南市立夜須中学校の生徒との間に長く続く友情を築き、ジェンダー平等を目指し、ディーセント・ワークの機会を追求するよう鼓舞する。

活動

a. SMART目標フレームワークの紹介（具体的、測定可能、達成可能、関連性がある、期限が明確）
b. JPYがOPYに折り紙を教え、高知県民へのプレゼント作成
c. OPYが英語で書いた手紙をJPYが日本語に翻訳し、夜須中学校の生徒たちに手紙を渡す。

成果

a. PYは、SMARTゴールの枠組について学び、自国で取り組みたいジェンダー平等に関する重要課題を決めた。
b. PYは、夜須中学校の生徒たちを鼓舞するような手紙を協力して書いた。

コース・ディスカッション・セッション４

ねらい

a. PYが自国における差し迫ったジェンダー平等の問題に取り組む上で設定したSMARTゴールに対して、実行に移すよう意欲を高める。
b. 大衆文化がどのようにジェンダーの役割を描いているかを認識し、ジェンダーの固定観念を批判的に見る。

活動

a. 未来の自分に対してタイムカプセル・レター（１年後に開封）を書くことで、ジェンダー平等と経済的エンパワーメントに向けたプロジェクトのモチベーションを高める。
b. 音楽、アニメ、映画、童話など、大衆文化の中でジェンダー平等がどのように描かれているかを議論し、ジェンダー平等を反映した形で書き直してみる。

成果

a. PYは、SMART行動計画を策定し、それぞれの国に戻ってジェンダー平等と経済的エンパワーメントを促進するためのプロジェクトに取り組む上で、自らのモチベーションを高めることができるようになった。
b. PYは、大衆文化に描かれたジェンダーの固定観念を懐疑的に見ることができた。

(4) サマリー・フォーラム（成果発表会）

PYは、オンライン及び対面のディスカッション、高知県でのプログラム、そして今後の行動計画から得た反省と教訓について発表した。

(5) 自己評価（PYによるフィードバック）

a. PYは、主な学びとして次のように語った。
   i. ジェンダー平等の問題に取り組むために、各国がどのような方法を用いているかを学び、そのアイデアを持ち帰って自国の政策立案に役立てる。
   ii. ジェンダーの不平等に対して発言する勇気と強さを持つ。
   iii. ジェンダー平等と女性のエンパワーメントに関する話に男性が積極的に参加することを歓迎し、奨励することの重要性
b. PYは、夜須中学校の生徒たちとの交流を楽しみ、男女共同参画を推進し、日常生活の中で実践するように働きかけた。
c. PYは、高知県の政治家や企業経営者と関わる機会を持てたことに感謝し、今後のSWYでは、男女共同参画を促進するための様々な視点について話し合うため、政治家との討論会を行うことを提案した。
d. PYは、こうち男女共同参画センターで行われた「共生社会の実現」に関するCD-02との共同ディスカッションで、様々な視点から話を聞き楽しく学べた。今後のSWYでは、特にSDGsの目標の多くが相互に関

連していることから、より多くCD間での活動を行うことを提案した。

(6) ファシリテーター所感

内閣府及び一般財団法人青少年国際交流推進センターの方々には、オンラインと対面の長所を組み合わせた令和５年度「世界青年の船」事業を企画していただき、感謝している。PYは、オンラインのディスカッションに積極的に参加してくれた。時間帯が２つのグループに分かれているため、PYがもう一方の時間帯のPYとバーチャルに交流できるように、オンライン共同作業ツールを用いることは有益であった。PYは、日本での対面プログラムとにっぽん丸の船上において、友情及び互いの文化への理解を深め、これらの関係を基に、ジェンダー平等を推進・擁護するために、事業終了後も協力し合い、活動を展開している。

また、PYは、京都府、兵庫県、高知県での寄港地活動を通じて、日本文化への理解を深める機会も得た。さらに、地域社会との関わりを楽しみ、男女共同参画を推進する上での課題に対する解決策をブレインストーミングして話し合った。PYは、SWYで得た知識、スキル、経験を生かし、フェミサイド、セクシュアル・ハラスメント、女性器切除、ジェンダーの固定観念、教育へのアクセスなど、各国の喫緊の課題に取り組むための行動計画を実行に移すことに意欲を見せている。

CD-02 共生社会の実現

ファシリテーター: Ms. Lillian Solheim

(1) ディスカッションの目的とねらい

共生社会は、その構成員全員のウェルビーイング及びインクルージョンを志向するものである。本CDの目的は、全ての人にとってレジリエントで良好な社会を作るための貢献とは何があるかを考えることである。社会のつながりを保つような絆や関係性とは何か、より共生的であるためには何が求められるか、社会を分断するような人口統計学的、経済的、社会的、政治的課題とは何かを探る。

ねらい

a. 共生社会に関する理論的概念を学ぶ。
b. 地元での取組、現実、課題について話し合う。
c. 共生に向けた青年による貢献について話し合う。
d. 活動的な市民となり、地域社会やSDGsに積極的に貢献するための実践的スキルとモチベーションを得る。

(2) 事前課題

a. 自国での共生社会に関する主な問題を提示
b. 自国における若年層の失業及びニートの現状について提示
c. 自国において、共生社会に対して貢献している取組、組織、または人物について調査

(3) 活動内容

A. オンライン交流

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. チームビルディング
b. 社会的なつながりやネットワークについて学ぶ。

活動

a. PYの自己紹介
b. 本CDへの導入
c. 期待していること、心配していること
d. ネットワークマッピングとディスカッション

成果

a. PYはお互いに知り合い、CDの目的と目標を理解した。
b. PYは、自分がどのグループやネットワークに属しているかを振り返り、社会的ネットワークと共生社会の関連性について話し合った。
c. PYは、社会資本など、共生社会に関する概念に精通した。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

a. 共生社会（歴史及び複数の定義）について学ぶ。
b. 各国の共通点と相違点について話し合う。

活動

a. 共生社会に関して理論を学ぶ。
b. 国別発表

成果

a. PYは、共生社会の様々な定義、概念の成り立ちに関する歴史的経緯の概略、共生社会に関連する重要点について学んだ。
b. PYは、他国における共生社会について、それを可能にしている要因や脅威を含めて学び、各国間の類似点と相違点についても学んだ。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

a. SDGsと共生社会との関係について学ぶ。
b. 雇用と共生社会の関連性について考える。
c. 各国における青年の失業とニートの状況について話し合う。

活動

a. SDGsについての簡単なプレゼンテーション（歴史、背景、共生社会に関連する様々な目標）及び共生社会との関係
b. 参加国における青年の失業とニートについてのプレゼンテーション及び、社会がどのように状況を改善できるかについてのグループ・ディスカッション

成果

a. PYは、SDGsと共生社会の関係についてより深く学んだ。
b. PYは、各国における青年の失業状況について詳しく学んだ。

B. 船上プログラム

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. チームビルディング
b. 共生社会についての探究を続ける。

活動

a. セッション１～３の簡単なまとめ
b. 風船と爪楊枝を用いたアクティビティ
c. 共生社会に関する発言をめぐる活動（以下のような発言にどれだけ同意できたかに応じて自分の立ち位置を知る：「私の国では、人々は親世代よりも良い未来を手に入れるチャンスがある」「誰もが質の高い教育を受けることができる」「困ったときには隣人に助けを求めることができる」
d. ある国で新しく任命された共生社会担当大臣に助言をする青少年諮問グループの一員であることを想定し、共生社会に関する事例に取り組んだ。事例の概要は以下の通り。
   - 共生社会の利点
   - 共生社会に影響を与えうる制度や組織の概要
   - インクルージョンの欠如の原因と、共生社会に与える影響
   - 学校はどのように共生社会を促し、貢献できるか
   - 共生社会に貢献する公共イベントをデザインする

成果

a. PYは、風船を用いた活動を通じて、共通の目標を達成するために、協力するより敵対的で暴力的な解決策に頼るほうがいかに簡単かを学んだ。
b. PYは、共生社会に関する知識を深め、ブレインストーミングを行い、事例に対する創造的で現実的な解決策を考えることができた。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

平和、対立、共生社会について学ぶ。

活動

a. 暴力を描いた人間像
b. 平和（肯定的／否定的）、対立、暴力（直接的／間接的）に関する理論を学ぶ。
c. 紛争について分析

成果

a. PYは、平和、対立、暴力に関する概念について学んだ。
b. PYは、自国における対立について１つ選び、簡単な分析を行った。
c. PYは、暴力がいかに共生社会を妨げるか、そして共生社会が平和と発展の前提条件であることを学んだ。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

「共生を守るスピード・デート」活動を通じて、世界の共生社会の取組について学び、刺激を受ける。

活動

a. PYは、自国から選んだ取組や活動家を紹介するポスターを作成した。
   - 根本的な問題
   - SDGsとの関連性
   - 共生社会への貢献
   - 実績
   - 個人のスキルや資質
b. 自らのコミュニティにおける共生社会の実現に向けて必要なスキルと資質について、グループ・ディスカッションと比較を行う。

成果

a. PYは、共生社会のために活動している先駆者や組織について学んだ。
b. PYは、共生社会に取り組む上で適切な個人の資質について考察した。

コース・ディスカッション・セッション４

ねらい

a. 青年がどのように貢献できるかを考える。
b. 青年の参画に関して理論を学ぶ。
c. PYの行動を後押しし、将来の貢献について考えさせる。

活動

a. 青年がいかにして積極的な市民となり、共生社会に貢献できるかについてのグループ・ディスカッション
b. 青年の参画に関する理論学習
c. 将来の個人的な目標についての振り返り

成果

a. PYは、青年が共生社会に貢献する機会と可能性について考え、これを促進する社会構造や課題（政治的、構造的、経済的、社会文化的）について学んだ。
b. PYは、青年及び青年の参加に関して理論的な知識（人

口学的課題、若年層の膨み、青年参画の段階）を得た。
c. PYは、SWY後、自分たちに何ができるかを考え、紙に書き出した。

(4) サマリー・フォーラム（成果発表会）

共生社会の概要とCDから得られた主な学習成果を発表し、なぜ青年による共生社会への参画が重要なのか、そして課題のみならず利点やチャンスについても共有した。また、高知県での訪問が共生社会に対する自らの視野をどのように広げたか実例を通して発表した。「共生社会のヒーロー」のイメージを通して、共生社会に貢献するために必要なスキルと資質が説明され、スピード・デートでの具体例も紹介された。帰国後の活動についても発表した後、誰１人取り残されることのないよう、率先して行動することを呼びかけた。

(5) 自己評価（PYによるフィードバック）

a. 本CDは、共生社会に関する様々な視点や経験を与えてくれた。自らの学問的な背景から、私の共生社会に対する考えは、主に学術や概念、理論によるところが大きかった。しかし、オンラインで種々の課題、問題、そして現実的な解決策について議論し始めるや否や、提案について創造的であること、さらには少々風変わりでいることの重要性に気付いた。日本に来て、様々なタイプの共生社会を経験し教育、学校、人が集まるような活動、帰属意識がいかに重要であるかをより強く意識するようになった（メキシコ）。
b. 本CDで、共生社会という概念をより深く理解することができた。学術的な観点だけでなく、共生社会に関するより実践的な洞察も得ることができた。このコースは、たとえ微力であっても社会に貢献しようという気持ちにさせてくれた。本当に感謝している（日本）。
c. 「共生社会の実現」というテーマは、私には難しいように思えたが、ファシリテーターのおかげで、とても身近なものだと感じた（日本）。
d. 本CDでは、共生社会がいかに重要であるか、持続可能な社会を維持するためのあらゆる側面の支えとなることを学んだ（ヨルダン）。

(6) ファシリテーター所感

一貫して積極的に議論に貢献してくれたPYは、様々な対話型活動、プレゼンテーション、グループ・ディスカッションを通して、共生社会という概念を探究し、それぞれの国でそれが何を意味するのか、主な課題について議論した。共生社会に対する青年の貢献について学び、自身がどのように行動を起こせるかを考えてくれた。

高知県でのプログラムでは、PYはCDで学んだ課題をさらに掘り下げることができた。地域の課題を学び、実際の事例を題材に解決策を発表することもできてよかった。実行委員会のご尽力に感謝申し上げる。

総括すると、CDの目的と目標は達成された。PYと知り合えたことは私の喜びであり、将来、地域社会の共生に有意義な貢献をしてくれると信じてやまない。

CD-03 質の高い教育の提供

ファシリテーター: Ms. Nitika Ennion

(1) ディスカッションの目的とねらい

a. 質の高い教育について理解する。
b. 日本と世界の教育問題と解決策に目を向ける。

(2) 事前課題

a. SDGsについて、国際連合のウェブサイトを見る。各セクションを開き、17の目標について理解を深める。
b. 国際連合「持続可能な開発目標」DEEP DIVEのSDGs目標４「質の高い教育」を観る。
c. 自国の教育情報について調査する。
・ 自国の就学前教育、初等教育、中等教育、高等教育の統計について
・ 教育の各課程へのアクセスのし易さ
・ 教育の障壁となっているものは何か、どのような解決策が試されてきたか、解決策の提案はないか

(3) 活動内容

A. オンライン交流

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. グループとしての土台を作る。
b. お互いを知る。
c. 質の高い教育の意味について概観する。
d. インクルーシブで公平な教育について深く掘り下げ、それらが私たちにとって何を意味するのかを話し合う。

活動

a. コースの紹介とSDGsの概要
b. PYが自己紹介をし、本事業へ参加した理由を話す。自分自身を表す特別なアイテムを持参する。
c. インクルーシブ、平等性、質の高い教育について、Jamboard上で３つのグループに分かれて話し合う。各グループから１人がフィードバックを行う。

成果

a. チームの絆を深め、SWY及び、本CDに参加した動機について知った。
b. 質の高い教育、インクルーシブ、平等性の定義について理解した。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

a. 21世紀型スキルである４つのCと、教育におけるその重要性について話し合う。
b. SDGs目標４の全貌を掴む。
c. 質の高い教育とは何かを議論する。

活動

a. 複数のグループに分かれて、教育における重要性について話し合う。
   1. Critical thinking（批判的思考）
   2. Creativity（創造性）
   3. Collaboration（協働）
   4. Communication（コミュニケーション）
b. 目標4.1〜4.7について、各グループでそれぞれ５分間話し合った後、全体グループに戻って発表する。
c. 個人での実践 - SDGs目標４のターゲットの１つに取り組むために、自身が既に持っている、または成長させたいスキルは何かをJamboardで共有する。

成果

a. 21世紀型スキルの４つのCと、それらが教育にどのような影響を与えるかについての知識を得た。
b. SDGs目標４への理解を深め、その知識をより広いグループと共有する能力を得た。
c. どのようなスキルを持ったPYが参加しているのか、あるいは「質の高い教育」に関してどのようなスキルを伸ばしたいのかを確認した。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

a. 青年がどのように教育を受けてきたのか、より多くの青年が教育に関わるためにどのような解決策があるかを理解する。
b. 若者が教育に関与しない理由について話し合う。
c. 社会の様々なレベルで役に立ちそうな方法について話し合う。

活動

a. チェックイン
b. グループに分かれて自身の青少年期を振り返る。
c. 青年に焦点を当て、若者が教育に関与しない理由は何かを考える。
d. Jamboardを用いて、青年が家族、学校、行政と様々なレベルで関与するには、どのような方策が役立つかをグループで話し合う。

成果

a. 自身が教育に関心を持ち続ける上で、何が役に立ったかを理解する。
b. 社会における様々なレベルに即したアイデアのリストを作成し、青年による関与に資するアイデアを検討する。

B. 船上プログラム

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. SDGs目標４について理解し、解決の一助として何ができるかを理解する、という共通の目標を持つPY同士がグループとしてつながる。
b. SDGsの目標についておさらいをする。
c. 各国の教育制度を理解する。
d. 日本の教育制度を理解する。

活動

a. アイスブレイク及びチェックイン
b. 質の高い教育を扱う本CDの文化についてファシリテーターによる説明
c. SDGs目標４の７つのターゲットの中の１つに対して、達成のためのアイデアを出し、グループで話し合う。その結果を全体で共有する。
d. 少人数のグループに分かれて、OPYは自国の教育制度について共有する。また、全体でも共有する。

成果

a. PYは、SDGs目標４及び、７つのターゲットについて確認し、その解決策を考え出した。
b. PYは、他国の教育制度を理解し、共に知識やアイデアを共有できるようになった。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

a. 教育事業とはどのようなものか、また実施に必要な手順について理解する。
b. 教育の世界で用いられる重要な語句とその意味について話し合う。

活動

a. アイスブレイク及びチェックイン
b. PYはグループに分かれ、ユネスコの成功事例を参照し、このケーススタディに関する質問に回答する。
   1. 背景について説明すること
   2. このプロジェクトの目的は何か
   3. どのように実施されたか
   4. どのようなリスクや課題があり、それをどのように克服したのか
   5. どのようにしてプログラムを継続するのか

その後、このケーススタディについて、より大きなグループで共有を行う。

c. 複数のPYを選び、障壁、解決策、質の高い教育をめぐってフィッシュボウル・ディスカッションを行う。

成果

a. ユネスコの教育に関するケーススタディについて検討し、その手順を理解した。
b. 「クリティカル・シンキング」や「質の高い教育」といったフレーズについて自らの理解を表し、話し合って他者からも学ぶことができた。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

a. 教育事業の成功例について学ぶ。
b. グループメンバーの出身国から１か国選び、SDGs目標４を達成するためのプロジェクトを設計する。

活動

a. アイスブレイク及びチェックイン
b. ファシリテーターがタイにおける幼児教育の教員研修プロジェクトについてのプレゼンテーションを行う。
c. 与えられたデザイン・モデルを用いて、教育目標に向けた具体的なプロジェクトを設計する。

成果

a. 教育事業がどのように実施され、成功裏に継続され得るかの実例を目の当たりにし、自分たちのプロジェクトを立ち上げる意欲をかき立てられた。
b. PYは、教育事業の６ステップについて各自で作成し、プロジェクトを成功させるためには、効果的な計画を立てる必要があることを学んだ。

コース・ディスカッション・セッション４

ねらい

a. 各自が提案する教育プロジェクトについて互いに理解を深め、建設的なフィードバックを行う。
b. 高知県の教育問題とその解決策について話し合う。

活動

a. ギャラリー・ウォーク：グループによるポスター発表を部屋に分散させて配置し、PYが移動して読み、コメントやアイデアを付箋に書き残す。
b. 他者によるアイデアと、それがプロジェクトにどのように役立つかについて検討する。
c. グローバル・カフェ：高知県におけるプロジェクト
３つの「カフェ」スポットが設けられ、高知県の教育担当が提示した３つの課題例を「ホスト」が提示し、各カフェで、３つのグループが順番にアイデアを出し合い、問題解決のために行われた既存の議論にさらに意見を加える。

成果

a. フィードバックや新しい意見を得られるように、各自が提案するプロジェクトをグループ内の他のメンバーに発表した。
b. 高知県における教育問題について全員で議論し、改善案が出された。これは、高知県での寄港地活動におけるCDの準備として役立った。

(4) サマリー・フォーラム（成果発表会）

PYは、オンライン・ディスカッションから高知県での寄港地活動に至る全ての学びをまとめ、SWYコミュニティに向けて発表した。

(5) 自己評価（PYによるフィードバック）

a. 本CDで議論に加わるのは最高の時間だった。セッションはいつも活気にあふれ、エネルギッシュで、雰囲気はとても前向きなものだった。議論の中身は難しく、ぶつかり合うこともあったが、ファシリテーションはすばらしく、話し合いは建設的だった。難しさと楽しさのバランスがとれていた。教育というトピックは、すべての人が学生時代の経験から意見を持っているので、話はすぐにヒートアップする可能性があったが、安心できる建設的な場が用意され、全員が敬意と忍耐を持って貢献していた。
b. ファシリテーターはPY全員を支え、力づける大黒柱であり、質の高い教育分野での豊富な経験により、計り知れない価値を与えてくれた。ケーススタディや教育の核心部分、様々なアイデアの実践的な応用について学ぶ手助けをしてくれた。CD-03のみならず、PY全員を教育してくれ、非常に満足している。このSWYが私の人生で最高の時間になったことを彼女に感謝したい。

(6) ファシリテーター所感

質の高い教育を促進できてうれしく思う。これは私の情熱であり、長年にわたって扱ってきたことだ。それを世界中の若いリーダーたちと分かち合い、その学びと成長を促すことができたのはすばらしいことであった。

内閣府、日本青年国際交流機構（IYEO）、そして令和５年度「世界青年の船」事業運営スタッフの皆様に感謝申し上げる。

ファシリテーター: Mr. Berzenn Urbi

(1) ディスカッションの目的とねらい

a.「自分の中にあるリーダーシップの可能性を伸ばす」
PYは、自分が持っているリーダーシップの可能性を発見し、リーダーシップのスキルをさらに高めるための様々な戦略を立て、青年のエンパワーメントに果たす役割を考える。

b.「社会的・政治的意識を高める」
PYは、世界が直面している様々な地球規模の問題、SDGs達成のために青年が果たす様々な役割を理解し、地域社会の変革の担い手となるためのリーダーシップ能力を高める。

c.「批判的・創造的思考」
PYは、様々な情報源（講義、読書、個人的な調査）から得た情報を合わせて、青少年のエンパワーメントと育成を促すプレゼンテーションや創意に富んだプロジェクトを行う後押しを受ける。

d.「青少年のウェルビーイングを高める」
PYは、自分自身のウェルビーイングを向上させ、地域社会や他の青少年リーダーに影響を与えるために、自分自身の生活の中で応用できるライフスキルや戦略を身につける。

e.「コミュニケーション」
PYは、会話を通した参加が不可欠である本CDの中で、口頭でのコミュニケーション能力を養う。本CDの課題に対してフィードバックを受けることを通して、PYは文章によるコミュニケーション能力についても養う。

(2) 事前課題

PYは、自分の国等で現在実施されている青少年のエンパワーメントや育成に焦点を当てた社会事業や取組から1つ選び、それに関する自分自身の観察や分析について、英語500語のエッセイを書いた。PYは、青少年プログラムを成功に至らしめた様々な要因を評価・分析し、またそのプログラムが為し得なかった事柄についても特定した。

(3) 活動内容

A. オンライン交流

コース・ディスカッション・セッション1

ねらい

青少年のエンパワーメントと育成に関する基礎知識を得る。

活動

a. グラウンド・ルールの作成
b. 青少年のエンパワーメントとは何か
c. SDGsを達成するために若者が果たす様々な役割についてのディスカッション

成果

a. PYは、青少年のエンパワーメントと育成とは何かについて基本的な理解を深めた。
b. PYは、SDGs達成において青年が果たす様々な役割について見識を深めた。

コース・ディスカッション・セッション2

ねらい

青年の失業や質の高い教育へのアクセスに影響を与える様々な社会的・政治的要因について学ぶ。

活動

a. ワールド・ユース・レポート及びSDGsに向けた2030アジェンダについてのディスカッション
b. 青少年が質の高い教育を享受することに関するディスカッション
c. 青年の失業についてのディスカッション

成果

a. PYは、SDGsに向けた2030アジェンダ及びSDGs達成における青少年の役割について見識を深めた。
b. PYは、青少年に関して、質の高い教育を享受すること及び雇用をめぐる問題について見識を深めた。

コース・ディスカッション・セッション3

ねらい

自分自身の持つリーダーシップの可能性と、自分たちが地域社会で果たすことのできる役割について学ぶ。

活動

a. 様々なリーダーシップ理論についてのディスカッション
b. 活動1: アイデンティティー：私とは誰か
c. 活動2: リーダーシップ育成計画
d. 事前課題の発表

成果

a. PYは自分自身のアイデンティティーについてより深く理解した。
b. PYは、自分自身の育成計画を立て、それを実行することの大切さを学んだ。

B. 船上プログラム

コース・ディスカッション・セッション1

ねらい

a. SDGsの達成に向け、誰1人取り残さないことの重要性を理解する。
b. 感謝の力、個人が持つ偏見の影響力、プリンシプル・

オブ・パスについて理解する。

活動

a. SDGsにおける「誰１人取り残さない」という考え方について
b. 感謝の日記
c. 青少年を後押ししたり、育成する際に、自身の持っている偏見についての自覚
d. プリンシプル・オブ・パスについての議論：自らの身の振り方を決めるのは何を意図しているかではなく、どこを向いているかである。

成果

a. PYは、SDGsの達成において、誰１人取り残さず、全ての人、特に青少年に配慮することの重要性について、より深い洞察を得た。
b. PYは、自己や他者を力づける上での戦略について理解した（感謝の日記、個人が持つ偏見の影響力、プリンシプル・オブ・パス）。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

a. 孤独が特に青少年の間でまん延しており、取り組むべき課題であることを学ぶ。
b. 感謝の持つ力を理解する。

活動

a. 孤独と、それがまん延するものとまでみなされる理由についてのディスカッション
b. 感謝の手紙を書く。
c. 謝罪の手紙を書く。
d. 「過去を水に流す」活動

成果

a. PYは、なぜ孤独がまん延するものとみなされるのかについて洞察を深めた。
b. PYは、孤独に関する問題に取り組む上で社会的つながりの重要性を学んだ。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

青少年が質の高い教育を受けられるか否かについての現状や、青少年の失業に関する諸問題について学ぶ。

活動

a. 青少年が質の高い教育を享受できているか否か、また青少年の失業に関して、世界的なデータを用いたディスカッション
b. 自国における質の高い教育の享受についてのグループ・ディスカッション
c. 青少年の問題にどう対処するか、いくつかの解決策を提案

成果

PYは、質の高い教育の享受と青少年の失業の解決に関し、青少年の役割について見識を深めた。

コース・ディスカッション・セッション４

ねらい

a. 青少年に対する異なる種類の虐待について学ぶ。
b. 青少年に影響を及ぼす様々な精神衛生上の問題を学ぶ。

活動

a. 青少年に対する様々な種類の虐待をめぐるディスカッション
b. 青少年に対する虐待を適時に報告することに関したグループ・ディスカッション
c. 青少年の精神衛生上の問題をめぐるディスカッション

成果

PYは、青少年が抱える様々な種類の虐待や精神衛生上の問題やこれらの問題に取り組む上で青少年が果たす役割について見識を深めた。

(4) サマリー・フォーラム（成果発表会）

a. PYは、誰１人取り残さないというSDGs達成における青少年の役割について発表した。
b. PYは、青少年を取り巻く様々な世界的な社会・経済問題について提示し、これらに取り組むための解決策について話し合った。
c. PYは、プレゼンテーションの内容を準備し、プレゼンテーション用スライドを作成する際に、チームとしてどのように動くかを学んだ。全てのPYが互いに助け合うことができた。

(5) 自己評価（PYによるフィードバック）

a. 私がSWYで最も満足したことの１つは、CDである。ファシリテーターはPY一人一人を気にかけてくれた。CDには本当に感謝している。他の人にもこのCDに参加することを勧めたいかと訊かれたら、もちろん、と答える。
b. 本CDは、私にとって本当に洞察に満ちたものであった。どのセッションからも多くのことを学んだ。自分の人生を振り返り、本当に力が湧いてくるような方法で構成された場を与えてくれた。議論されたテーマや概念は、適切で印象的なものばかりであった。
c. 青少年のエンパワーメントに関するディスカッションを踏まえれば、教育を受けていない青少年の苦境と、その中で憂慮すべき自殺率の上昇に対する課題解決に取り組むことは不可欠である。青少年のエンパワーメントとは、青年個人が潜在能力を最大限に発揮するために必要な手段や支援を提供することと定義され、重要な解決策とされることが多い。自己啓発が何よりも大切であると認識することが重要で、前向きな変化のために優しさを培うよう努力することの重要性が強調されていた。

d. CD-04は本当に楽しかった。青少年の成長に影響を与えるさまざまな要因について多くを学んだ。青少年をエンパワーすることの利点について学び、故郷の恵まれない若者たちともっと一緒に働きたいと思うようになった。
e. 青少年のエンパワーメントは、青少年への様々な対応方法によって行われるもので、SWYには多くの国の人々がいるため、国籍や文化的な違いによって関わり方のタイプも異なってくる。しかし、CD-04では、関わり方が常に生き生きとし、相手の反応に即したものであり、このような強力なものを目の当たりにした私もいくつかの手法を持ち帰りたい。

(6) ファシリテーター所感

このすばらしい事業と仲間の一員になれて、いつも身が引き締まる思いがする。青少年のリーダーたちを指導し、鼓舞する機会を再び与えられたことに感謝しており、内閣府に対し御礼申し上げる。

CD-04のファシリテーションは楽しかった。PYはディスカッションに非常に積極的で、私も多くのことを学んだ。すばらしい思い出ができてありがたく思っている。

PYが様々な社会事業に参加し、社会に貢献する姿を楽しみにしており、このCD-04 のPYが社会事業を立ち上げ、自分自身や他者をエンパワーする一助となることを期待している。友情と相互理解、リーダーシップの育成、社会への貢献を目指したグローバル・コラボレーションを大切にするのがSWYである。PYがこれらの役割を果たす準備が整ったことを報告できて嬉しく思う。CD-04オハナ（家族）の今後の活躍を祈念している。

CD-05 地域の伝統と歴史の継承

ファシリテーター: Ms. Priscilla Madrid Valero

(1) ディスカッションの目的とねらい

a. 地域の伝統と歴史を保存し分かち合う、極めて実践的な手法を学ぶ。
b. 仲間である他のPYからそれぞれの歴史と伝統を学ぶ。
c. 多文化コミュニケーションと対話を実践し、発展させる。
d. 文化、伝統、歴史に関する批判的思考を養う。
e. リーダーシップ・スキルを育む。

(2) 事前課題

a.「ツアーガイド・エクササイズ」
自分の住んでいる場所の歴史ツアーを企画する。このツアーには、歴史的な場所、伝統的な食べ物、そこで生まれた有名人、芸術、伝統、伝説などを含めることができる。
b. 住んでいる町や地域の伝統的な料理や食べ物を１つ選び、ビデオ・レシピを作成する。多くの人が知らない料理が望ましい。
c. 自分たちの伝統についてより深く研究する。

(3) 活動内容

A. オンライン交流

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. 安心して意見交換できる場作り
b. CDへの期待
c. 地域の伝統と歴史の継承に資する実用的な手法の開発
d. 伝統とは何か、文化とは何かを定義

活動

a. 導入
b. 即興ゲーム
c. 事前課題での経験を共有する。
d. PYによる伝統についてのプレゼンテーション
e. グローバル社会における本CDの重要性についてのディスカッション
f. CDで話し合われる内容に関し、PY及びファシリテーターの期待についての確認
g. まとめと振り返り
h. 終わりの一言

成果

a. CDの参加者を尊重し、個人的な情報を口外しないことについて合意した。
b. PYが互いの背景について知ることができた。
c. PY同士の絆が芽生えた。
d. CDへの期待を明確にした。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

a. PYがさらに伸び伸びと創造性を発揮することができるようにする。
b. 地域の歴史と伝統の継承の中で、自分自身の歴史がどのように関係してくるかを考える。
c. 自分の経験や意見を自信を持って伝えられるようにする。

活動

a. アイスブレイク
b. 前回のセッションについての話合い

c. 事前課題に関するPYによるプレゼンテーション
d. 短い話や、絵、若い頃の自分に宛てた手紙、詩などを用いた創造的な方法で、自分自身の歴史や伝統について振り返る練習
e. PYが練習のアイデアを共有し、互いにフィードバックする
f. まとめと振り返り
g. 終わりの一言

成果

a. CD-05のオンライン・ミュージカル・プレイリストを共同で作成し、各自の地域の音楽を共有した。
b. PYが、自分自身の歴史や伝統との関わりについて考えた結果、オリジナル作品（詩、物語、絵など）を創作した。
c. CD-05における辞書を作成した。自分たちの言語や文化にしか存在しない単語が追加され、非常に特殊でユニークな事柄が説明された。言語と文化についての考察がなされた。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

a. 他の参加国の文化や伝統をより深く理解する。
b. 地域の歴史と伝統の継承につき、文化の推進者としてどのように直接的な貢献ができるか考え始める。
c. 変革の担い手としてのリーダーシップを発揮し、多文化主義を尊重し受け入れる。

活動

a. アイスブレイク
b. これまで発表や発言の機会が少なかったPY対して、グループ全体の前で話をする機会を提供
c. ブレイクアウト・ルームに分かれて、伝統、文化、歴史に関する質問を用いる「スピード・シェアリング・アクティビティ」
d. 事後活動で取り組みたい伝統についてイメージや絵の共有
e. まとめと振り返り
f. 終わりの一言

成果

a. お互いのことをより深く知り、より深い質問をするようになった。
b. お互いの背景やコミュニケーションのスタイルに多様性を見出し始めた。
c. 本CDのPY用のオンライン・プラットフォームを作成し、課題や振り返りを共有した。
リンク：https://padlet.com/priscillamv/swy-traditions-izwm3kgfgygj2a14

B. 船上プログラム

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. 個人的な考えやものの見方を共有する上でさらに安心できる場づくりを行う。新たな対面の場でPYが快適だと感じられるようにする。
b. 創造的な考え方を身につける。
c. 異文化間の対話、理解、尊重を促進する。

活動

a. 「線の人生」エクササイズ（PYは自分の人生の浮き沈みと、その線が伝統とどのようにつながっているかを視覚的なグラフに表した。）
b. SDGsが伝統や歴史とどう関係するか、各自お気に入りのSDGsを伝統や歴史といかに結びつけることができるかを検討
c. フェイク・ヨガ(エナジャイザー)
d. グループに分かれ、各代表者がSDGsに関するアイデアや発見についての共有
e. まとめと振り返り
f. 終わりの一言

成果

a. 「線の人生」エクササイズの結果、PY同士の結びつきが強まった。
b. SDGsの理解を深め、それらが文化や伝統とどのように関連しているかを理解した。
c. PYは、伝統がいかに自分たちの人生や節目の一部を成しているかを知った。
d. 複雑なテーマについて、丁寧に文化に配慮した話し方をする場数を踏むことができた（例：SDGs5「ジェンダー平等」と伝統や文化との関わりが話題に上がった時など）。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

a. 異文化コミュニケーションを促進する。
b. チームワーク力を強化する。

活動

a. 即興的なコミュニケーション・ゲーム
b. SWYの文化と主要な構成要素作り及び定義
c. 文化の盗用についてのプレゼンテーション
d. 文化に敬意を払い、感謝すること、あるいは文化を流用することをテーマにグループ・ディスカッション
e. PYによる歴史と伝統に関するプレゼンテーション
f. まとめと振り返り
g. 終わりの一言

成果

a. PY総意としてのSWYの文化、伝統、価値観について定義した。
b. 文化がいかに進化し続け、複雑なものであるかにつ

いて考察した。
c. 新しい概念や考え方について理解した。

コース・ディスカッション・セッション3

ねらい

伝統と歴史の継承に対する批判的思考を養う。

活動

a. SWYの様々なイベントの中で、CDで学んだことをどのように実践したかを振り返る。
b. JPYによる日本の伝統についてのプレゼンテーション
c. カルチャーショックとその対処法についての解説
d. 歴史や伝統の語り手や視点について批判的に話し合うエクササイズ
e. 伝統と歴史を促進する上での創造的かつ成功した方法に関するプレゼンテーション
f. 終わりの一言
g. まとめと振り返り

成果

a. CDのコンセプトや教訓をSWYの経験にどう応用できるか理解した。
b. 歴史と伝統の継承に対する批判的思考を持つ上での手立てや方法について考えた。
c. 新しい文化との接触が伝統の持つ力学にどう影響するか、また多様な声を聞き、考慮する必要があるかについて考察できた。

コース・ディスカッション・セッション4

ねらい

a. 独創的な方法で文化と伝統の推進者となる。
b. 効果的なコミュニケーション・スキルとツールを開発する。

活動

a. 異文化コミュニケーションと理解を促進するゲーム
b. 粘土を用いてPYが大切にしている伝統を表現
c. 各PYが最終的なオリジナルプロジェクトを共有
d. 帰国後に歴史と伝統の継承を促進するためにどのように行動するかについての意思表明
e. PYによる詩の発表
f. まとめと振り返り
g. 終わりの一言

成果

a. 各PYが事後活動のプロジェクトを作成・発表した。
b. PYは、各自が最も重要だと思う伝統を目に見える物理的な形で表現した。
c. 帰国後の具体的な約束を行った。

(4) サマリー・フォーラム（成果発表会）

チームとしてPYは非常によく動き、全員がプレゼンテーションに貢献することができた。PYがいかにCDに専念し、CDや高知県で学んだことを実践し、文化、伝統、歴史を積極的に広めていくかがよく示されていた。

(5) 自己評価（PYによるフィードバック）

以下、フィードバック用のグーグル・フォームから匿名で引用する。

a.「ファシリテーターとして仕事の本質を最初から最後までよく理解しており、ファシリテーションのテクニックは参加型で、言葉の壁があっても全員が気持ちよくチームに貢献できた。」
b.「親切に全員を受け入れてくれるファシリテーターの姿に感謝している。躊躇したり、恥ずかしがったりするPYも含め、全てのPYが加われるように積極的に取り組む姿勢は、立派で感動的だった。」

(6) ファシリテーター所感

PYはCDのトピックに非常に共鳴し、互いをしっかりと支え合っていた。他の参加者の伝統文化により深く関わり、創造性を発揮し、より発言しやすくリーダーシップを発揮しやすいと感じられる空間が醸成されていた。事後活動のプロジェクトを公開した際には大好評を博し、自国でプロジェクトや経験を共有することの後押しとなった。時を経るにつれ、PYが自信を持ち、積極的に参加する姿を目の当たりにして、とても驚いた。本CDを担当する機会を与えて頂いたことに深く感謝申し上げる。

CD-06 魅力あるまちづくり

ファシリテーター: Ms. Pannaritsara Chuenjitrabhiramon

(1) ディスカッションの目的とねらい

目的

a. SDGs目標9、11、17に関する一般的な知識を得る。
b. CDで得た知識、スキル、経験を自身の選んだ職業に生かして、魅力的な地域社会やまちづくりに貢献する。
c. レジリエントなインフラ、インクルーシブで持続可能な産業化、イノベーションの促進、レジリエントで持続可能な都市やコミュニティづくりのために、既成概念にとらわれず、大きな視野で物事を考え、情熱とビジョンを持って、地域社会の他の人々と共有し、協力する能力を得る。

ねらい

a. 知識： PYは、自国の既存のソフト・ハード両面のインフラ、産業、イノベーションの課題について認識する。

b. スキル：体系的かつ前向きに考える方法、他者の意見を尊重する方法、社会課題の解決策を見つけるためにチームとして動く方法、レジリエントで持続可能な都市を促進する方法を学び、プレゼンテーション及び啓蒙に関するスキルを身につける。
c. 経験：SDGs目標９、11、17の推進と達成のために、他のPYや自国の人々と協力し、チームワークの精神を養い、イニシアティブを取り、リーダーシップを発揮する方法を見つけるべく、行動を起こす力を得る。

(2) 事前課題

個人課題

英文300語以内で以下の質問に答えるエッセイを書く。

a. なぜ本CDに参加したいのか
b. あなたの都市や国における産業、インフラ（ソフト・ハード）、イノベーションについてどう考えるか
c. 地域や都市、国をより魅力的なものにするために、青年として何ができるか、何をすべきなのか

国別課題

同じ参加国の青年で集まり、自国のイノベーション、産業、インフラについて話し合う。

(3) 活動内容

A. オンライン交流

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. SDGs目標９「産業、イノベーション、インフラ」についての認識を高める。
b. 各国の産業、イノベーション、インフラの問題について、視野を広げる。

活動

a. 自己紹介
b. SDGs目標９の紹介
c. 各国における主要産業、イノベーション、インフラ（ソフト・ハード）についての共有

成果

a. PYは、自国の主要産業、ソフト・ハード両面のインフラ、イノベーションについて認識を深めた。
b. PYは、他国のソフト・ハード両面のインフラの課題と、その課題に対処するための各国のイノベーションについて学んだ。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

a. 持続不可能な産業やインフラの要因、生活への影響について、PYが批判的かつ体系的に考えるよう促す。
b. PYが前向きに考え、危機の中にチャンスを見出すよう訓練する。

活動

a. 自国における脆弱で持続可能でないインフラや産業の要因と、自分たちの生活にどのような影響を与えたかを共有し、話し合った。
b. コロナ禍において、自国のインフラや産業が回復力を持たず、持続不可能であった場合、自らの生活にどのような影響を与えたかを共有した。また、コロナ禍に対処するために生まれたイノベーションについても話し合った。

成果

a. ソフト・ハード両面のインフラが強靭でない場合、災害発生時の生活の質に悪影響を及ぼすことを学んだ。
b. レジリエントで持続可能なインフラを構築することが必要であり、重要であることを学んだ。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

a. レジリエントで持続可能な都市と、どのように全住民の幸福度を向上させ、環境への悪影響を少なくするかについての知識を得る。
b. 強靭なインフラ、インクルーシブで持続可能な産業化の促進やイノベーションの促進が、なぜ自身や環境にとって良いことなのか、分析的に考える。
c. レジリエントで持続可能なまちづくりを促進するイノベーションについて議論する。

活動

a. SDGs目標11とレジリエントで持続可能な都市の概念に関する紹介
b. PYは、SDGs目標９と11の関係や、レジリエントで持続可能な都市がどのように経済の促進と活性化につながるかについての意見交換
c. レジリエントで持続可能なまちづくりを促進する新しいイノベーションについてのブレインストーミング

成果

SDGs目標11とレジリエントで持続可能な都市の概念、持続可能な都市が経済成長を促すことを学んだ。

B. 船上プログラム

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

東京の街を観察し、魅力的なこと、魅力的でないと感じることを好事例から学ぶ

活動

a. 東京都の魅力と魅力的でない点について話し合い、住民や観光客にとって東京都をより魅力的な都市にするための解決策やアイデアを出し合った。
b. 東京都のインフラ、産業、イノベーションについて議論し、自国と比較した。

成果

a. PYは、レジリエントなインフラ、産業、イノベーションの要因と影響について認識するようになった。
b. PYは、魅力的な地域社会を築くためには、人々が公共心を持ち、社会的責任を果たさなければならないことを学んだ。

コース・ディスカッション・セッション2

ねらい

a. アイデアを行動に移すスキルを身につける。
b. PYが行動を起こすよう力づけ、地域社会に前向きな変化をもたらす可能性を引き出す。

活動

a. SDGs目標9と11について話し合った。
b. 自分たちの地域社会の魅力の無さや、変化を起こすために自分たちができる行動について話し合った。

成果

a. PYは、レジリエントで持続可能なまちづくり（SDG 11）には、レジリエントで持続可能なインフラ、産業、イノベーションを作ることが重要であると理解した。
b. PYは、自分たちの可能性及び、地域社会に変化をもたらす力を自覚するようになった。

コース・ディスカッション・セッション3

ねらい

a. 各自のコミュニティや都市の強みと弱みを見極める方法を学ぶ。
b. 弱点や危機を機会に変え、建設的な解決策を見出すスキルを身につける。

活動

a. PYは、訪問した京都府の長所（魅力）と短所（魅力的でない点）について自らの経験と観察を共有した。
b. PYは、住民や観光客にとってより魅力的なまちづくりを行うための方法やアイデアについて話し合った。

成果

a. 訪問したコミュニティの強みと弱みを見出すことができた。
b. 危機の中には常に機会があること、あらゆる課題に対して建設的な解決策を見出す方法を意識するようになった。

コース・ディスカッション・セッション4

ねらい

a. PYがプレゼンテーション及び啓蒙のスキルを身につけられるようにする。
b. PYが地域社会で行動を起こし、問題を解決する力を身につけ、互いに協力して地域社会や都市の社会問題に取り組むことを促す。

活動

a. 各自が生活し、働いている街の魅力についてプレゼンテーションを行った。
b. 各自の情熱や夢、キャリアをSDGsの17個の目標全てにリンクさせ、魅力的なまちづくりのためのアイデアをチームで出し合った。

成果

a. 他者の考えを尊重し、心を開いて人の意見に耳を傾けることを学びながら、自分たちが地域社会にもたらす前向きな変化について、他者に協力してもらうべく自分の考えを発表し、主張する方法を学んだ。
b. PYは、自分たちのコミュニティをより魅力的なものにし、SDGsの17個の目標全てを達成するために、事業後のアイデアと行動計画を全て考え出すことができた。

(4) サマリー・フォーラム（成果報告会）

オンライン及び船上でのCDを通した学びについて発表した。プレゼンテーションは、CDに参加して得た知識と、寄港地で訪れた各都市での観察を組み合わせ、魅力的なまちづくりのためのアイデアや解決策をストーリー仕立てで発表した。

(5) 自己評価（PYによるフィードバック）

PYは、事業後にどのようなことをするのか、それぞれの考えや計画を共有した。ディスカッションで学んだこと、寄港地活動で学んだこと、CDでの活動やSWY全体で学んだことや経験したことを自分のキャリアにどのように生かし、SDGsの17個の目標全てに基づいた魅力的なまちづくりをどのように行っていくかを共有した。

(6) ファシリテーター所感

全PYが、CDの目標と目的を理解し、互いの意見や違いを尊重することを学んだ。相互理解、尊敬、友情を通じて、CDの中に強い団結が生まれた。

PYのものの見方と視野が広がり、CD全体とCDの目的と目標が成功裏に達成された。

オンライン及び船上でのディスカッション、京都府と兵庫県（淡路島）の地域訪問活動、高知県での地域実践活動を組み合わせたディスカッション・セッションは、PYが学んだことを最終的に地元の人々の社会問題を解決することに役立てることができ、非常に実りある有意義なものとなった。まずはPYが必要な知識を学び、スキルを身につけ、最終的に社会問題を建設的に解決するために、知識、スキル、前向きなマインドを応用することができるような構成のプログラムとすることができた。

CD-07 防災教育とツーリズム

ファシリテーター: Ms. Samantha. Javier

(1) ディスカッションの目的とねらい

a. グローバル・リーダー
多様性を尊重し、他者を勇気付けられるような国際人に必要な態度とスキルを身につける。

b. 異文化コミュニケーション

・ 防災意識を高める、示唆に富んで興味深いコンセプトとプロジェクトについてはっきりと述べる。

・ コミュニケーションとメディアを創造的かつ効果的に用いて、選んだトピックについて表現したり、取り上げたりする。

c. サービス精神旺盛な市民
地域及び世界の災害問題に対する認識と感受性を発揮する。

(2) 事前課題

a. PYは、これまでの人生で経験した災害の中で、最も印象に残っているものについて振り返った。

b. 「あまりに身近な出来事」
PYが遭遇した、または読んだ最も記憶に残る危機、緊急事態、災害に関するメディアの収集

(3) 活動内容

A. オンライン交流

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. コース及び学習スタイルの紹介

b. ステップ１：現状を振り返る。

c. 基本用語の定義

活動

a. エナジャイザー

b. 災害に関する基礎知識を問うオンライン・クイズ「自然対人間」

c. PY同士で知り合う。

d. 期待度の確認

e. 基本用語の説明

f. ブレイクアウト・ルームに分かれて「あまりに身近な出来事」について共有する。

g. 今年度のSWYで求められる成果とSDGsとの関わりについての講義

h. オンライン・セッション２に向けた課題：環境に関するユニークなニックネームを考える。

成果

a. PYが内容やファシリテーター、仲間のPYに対して期待したことは、以下の通りである。

・ 期待される内容とスキル：コミュニケーションスキルの向上、他の今年度のSWY参加国における喫緊の事態や災害について知る。

・ ファシリテーターと他のPYに対して：生涯の友情を築き、色々な事柄を可能にするような場づくり、社会的弱者のリスクを軽減する方法について自分自身の意見を共有する。

b. 最頻出の基本用語についての第一印象

・ 災害：「食料不足、水不足」

・ ハザード：「地図」

・ レジリエンス：「希望」「強靭性」

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

a. ステップ２：「あるべき姿」についてのインプット

b. 防災に向けて主要な利害関係者の特定

活動

a. エナジャイザー

b. 講義：ハザード、災害、リスクの定義と種類、減災と災害対策の視点

c. ブレイクアウト・ルームに分かれて「問題の核心を突く」という問題ツリー・エクササイズの演習

d. 課題：自身の地域における防災に関する好事例をまとめる。

成果

a. オンライン交流１グループの主要問題
(1) トルコにおける建物の脆弱性
(2) 標準的な地域における火災に対する脆弱性

b. オンライン交流２グループの主要問題
(1) 効果的でない震災復興対応
(2) コロナ禍に対する今年度のPYの脆弱性

c. 問題ツリー分析を行い、世界の様々な地域社会が直面している課題の直接的な結果や影響、原因について批判的に考えることができた。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

a. ステップ３：「どうすればたどり着けるか」アクション・プランニング

b. インスピレーションの源としての好事例の共有

活動

a. エナジャイザー・ダンス

b. レジリエントな地域づくりに向けたアプリシエイティブ・インクワイアリー（価値を見いだすための質問）のエクササイズ
(1) 定義段階：「CD-07で今日や月単位で、何について

話し合うのか」という問いに答えた。また、災害教育に関する好事例や、学齢期の子供たち向けの災害リテラシーに関する著書の一部をファシリテーターが紹介した。

(2) 夢の段階：「目覚めたら2030年だったと想像してみよう。レジリエンスや防災教育、観光の面で、各自の地域はどうなっているだろうか。」

(3) 設計段階：「どうすればその未来を実現できるだろう。各自の地域で災害問題に取り組むための行動、過程、システムについてのアイデアを共有しよう。誰が協力してくれるだろうか。支援者や関係者の名前を挙げよう。」

(4) 実装段階：「世界各地で災害に強い地域社会を作るために、自分自身はどのようなことに取り組むだろうか。」

c. PYの出身国における好事例を共有する。

成果

設計段階でPYは、より強靭な地域社会を作るために、以下の行動を提案した。

a. 災害対応における個人の能力開発
b. 地域のハザードマップ作り
c. 子供の防災教育
d. 被災国による国際相互援助
e. 被災地における持続可能な観光計画
f. より良いインフラのための国による投資
g. 文化財保護と災害リスク

B. 船上プログラム

コース・ディスカッション・セッション1

ねらい

a. 個人リスクとプランの振り返り
b. 地域のハザードマップ作り

活動

a. 「タワーチャレンジ」：個人、地域、社会の各レベルにおいてレジリエンスの概念を強調
b. 「パルスチェック」：自身の人生年表（個人の目標と防災の関係性）
c. 課題：にっぽん丸船内のハザードマップ作成

成果

山あり谷ありの個人年表を開示し、人生の正念場を乗り切るための対処法をいくつか明らかにした。それは以下のように分類できる。(1) 物理的なもの、(2) バーチャルなもの、(3) 心理的なもの、(4) 支援体制、(5) 教育、(6) 優れた行政、(7) 健全なエコシステムであった。

コース・ディスカッション・セッション2

ねらい

質問に答えよう：「地域のレジリエンスに対してどう貢献できるか」

活動

a. エナジャイザー
b. ハザードマップ作成の結果共有
c. （クリスチャン・エイドの）非常口シミュレーションゲーム

成果

a. PYが船内で危険と確認したのは以下の通りである：(1) 火災（自然）、(2)狭い階段での事故、(3)新型コロナウイルス感染症の発生（人為的）
b. PYは皆の安全を守ることなどといった、乗船中の社会的・行動変容的コミュニケーションを通じて解決しなければならない問題も見出すことができた。

コース・ディスカッション・セッション3

ねらい

a. ちょっとした簡単なステップで行動を変えることの大切さを学ぶ。
b. 防災のためのコミュニケーションの力を実感する。

活動

a. メディア・マインドフルネス：デジタル世界における批判的思考の活用と社会・行動変容コミュニケーションの概要
b. 対象相手を分析するエクササイズ

成果

PYは、地域実践活動の準備のため、(1) 高齢者、(2) 障害者、(3) 日本語を話したり理解したりできない外国人、それぞれのグループについて、対象者分析アバターとコミュニケーション資料（ポスターなど）を下書きした。この分析は、対象者の行動、動機、情報源にまで及んだ。

コース・ディスカッション・セッション4

ねらい

質問に答えよう：「犠牲者ゼロ、避難放棄者ゼロという目標に向けて、『あきらめる』という考え方を変えるにはどうすれば良いだろうか」

活動

a. エナジャイザー
b. 高知県でのプロジェクトに向けてのグループ分け
c. 高知県のリスク概要
d. 黒潮町における防災ツーリズムの概要
e. 地域実践活動のスケジュール確認

成果

a. CD-08のJPYが高知県のリスク概要を共有し、CD-07とCD-08の全PYが現地の事情に精通するようになった。
b. PYは、作成したコミュニケーション資料の草案に対して建設的な意見を述べ合った。
c. PYは、割り当てられた対象者に対して、３つの具体的な観光旅行プランを提案した。

- 高齢者：過去の災害の教訓を振り返るセミナーシリーズ
- 障害者： 地元の人々や観光客向けの避難標識に点字を追加
- 外国人：日本語を話さない観光客のための日本語による夜間避難訓練

(4) サマリー・フォーラム（成果発表会）

サマリー・フォーラムの冒頭でPYが「自然災害というものは存在するのか」とオーディエンスに問いかけた。これは、災害に対する見方が変化しており、リスクを軽減したり、災害を予防する上で人間が果たす役割に力点が移っているということを強調したものだ。この後PYは、Zoomや船上で行われたオンライン及び対面での活動について総括した。

また、防災教育と防災ツーリズムを統合する枠組も提案された。PYによると、防災教育は災害への備えのために不可欠であり、他方、防災ツーリズムは地域経済の活性化を支えるものである。

CD-07がカバーする４つのSDGs（SDGs目標４、８、12、13）と、各自がそれぞれの国において、よりレジリエントな地域づくりにどのように貢献できるかを振り返り、プレゼンテーションは締めくくられた。

(5) 自己評価（PYによるフィードバック）

評価セッションを円滑に進めるため、PYは次の２つの質問に回答した。 (a) 上手くいったことは何か、(b) 改善が必要な点は何か

a. 上手くいったことは何か
- 黒潮町での避難訓練
- ローカル・ユースとの交流
- グループ・ダイナミクス（例：エナジャイザーやゲーム）
- 防災ツーリズム企画、フィードバック・セッション
- 高知県での課題別視察
- 災害経験の共有と、他者からの学び

b. 改善が必要な点は何か
- 災害対策に特化した施設への訪問
- 本CDのトピックを教育と観光の２つに分ける可能性
- 課題別視察前にCDセッションの仕切り直しが予定されていた方が良かった。

(6) ファシリテーター所感

令和５年度「世界青年の船」事業のCD-07は、所属するPYが各自の役割を十分に果たし、大成功であった。オンライン交流は、災害対策を学んだ経験のあるPYと無いPY両方の知識水準を高める足がかりとなった。オンライン交流で学んだ基礎的な概念により、より実践的な内容の船内セッションを行うことができた。

最後に、地域実践活動では、全ての活動や訪問先がコースのハード面（インフラ）とソフト面（防災教育）の両方に触れることができるよう慎重に選ばれており、PYに対してこれ以上ない最良の経験を与えてくれた。

CD-08 防災対策

ファシリテーター: Mr. Gerardo Castañeda Garza

(1) ディスカッションの目的とねらい

a. 災害リスク削減の基本
- 災害リスク削減に関する重要な概念を学ぶ。
- 様々な文脈で災害リスク削減を推進する枠組や組織について認識する：SDGs（グローバル）、仙台防災枠組（災害リスク削減）、ESG（ビジネス）

b. 災害対策サイクル(PREMI-ER-RE)について学ぶ
- 予防、減災、応急、復旧（Preparedness, Mitigation, Emergency / Response, Recovery）
- 自身に関係した災害シナリオにおいて応用が利くかを見出す。

c. 防災対策
- ステークホルダーごとに異なる行動：個人、家族、地域、ビジネス、非政府組織、行政
- 行動の枠組：国家災害リスク削減、気候変動への適応、環境・社会・政府（ESG）の枠組み
- 過去の経験から学ぶ：より良い復興

(2) 事前課題

a. 米国疾病管理予防センター（CDC）『予防入門：ゾンビパンデミック』を読むこと。防災戦略がなぜ重要なのか楽しく理解することができる。

b. 「日本滞在中に必要なものは何か」を考えた上で荷造りを行う。

c. 緊急時に際しての、これまでの災害経験と望ましい役割を明確にする。

(3) 活動内容

A. オンライン交流

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. アイスブレイク

b. メンバー同士で共感を得るべく、自分たちが災害リスク削減に関心を持つ理由について話し合う。

活動

a. プレゼンテーション：PY全員が自分の名前、国名、災害リスク削減への関心などについて発表する。
b. 『予防入門：ゾンビパンデミック』を読むことで、非常時に必要となる多くの要素を楽しく知る。

成果

a. 初心者のPYにとっては、CD-08のテーマに関する基礎を学ぶ機会となった。
b. 同じCD内の他のPYについて知ることができた。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

a. 災害リスク削減に用いられている基本概念について知る。
b. 防災サイクルについて学ぶ。
c. 全ての人々がどのように防災サイクルに加わることができるかを明らかにする（例：医療関係者、報道関係者、軍関係者、ボランティア、公務員、企業経営者）。

活動

a. プレゼンテーション：災害リスク削減の基礎
b. プレゼンテーション：防災サイクル
c. ワークショップ「私に何かできる」：PYが災害問題にどのように関わることができるかを考える。

成果

PYは、ファシリテーターから教わったガイドラインを示しながら、SDGsと仙台防災枠組を踏まえて自分たちでプロジェクトを立ち上げるアイデアを発表した。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

最後のオンライン・セッションの目的は、チームの絆を強めることと、PYが抱く疑問を解決することに重点を置き、お互いをより良く知るための時間を設ける。

活動

a. ディスカッション：「本当に準備できているのか」日本に出発する前に確認しておかなければならない簡単な問題について話し合う。
b. フォーラム：船上活動に対する期待

成果

a. スケジュールを改めて見直すことで、当たり前だと考えていたニーズ（例：アレルギーについてファシリテーターに知らせること、荷物に関する予想外の問題）に気付いた。
b. これらの問題は全て、災害という状況の中で、準備の価値を連想させるものであった。

B. 船上プログラム

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. 海上での危険な状況を想像しながら避難訓練を行う。
b. ５分間で５人が完全に避難できるようになる。

活動

a. ４つのグループに分かれて避難戦略を立案する。
b. 船内での避難訓練

成果

全グループが避難の難しさや、ストレスがある中で避難することの難しさに対する認識を深めた。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

a. 言葉の壁やアクセシビリティの問題（移動や視力の障害）など、より困難な状況での避難訓練を行う。
b. 困難な状況下で10人の避難をコーディネートできるようになる。

活動

a. 視覚障害者（フェイスマスクを使用）、運動障害者（段ボールで足を固定）、英語でのコミュニケーションは禁止、英語以外（日本語、スペイン語、トルコ語、アラビア語など）は可能、とういう課題を考慮し、５分間で10人が完全に避難する。
b. 避難訓練開始時に避難するメンバーを、様々な場所に配置する。「災害時には自分の居場所を選べない」

成果

a. PYは、意思決定におけるコミュニケーション、リーダーシップ、役割、文化の違いに関する課題について学ぶ機会を得た。
b. 避難のベストタイムは５分20秒であった。
c. PYは、全員を見つけ、誰も置き去りにしないことに集中し、実際のシナリオの中で自分たちの戦略を改善する方法について考察した。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

人災や自然災害時の人道支援における実際の証言から学ぶ。

活動

ウクライナやガザでの紛争などについて、専門家の経験と証言を交えて議論する。

成果

a. PYは、日本及び海外の問題を共有しながら、世界各地で自分たちに関係する今日の問題について話し合う機会を得た。
b. PYは、ボランティア活動が被災地内外でどのような影響を及ぼすか、また、災害への備えと対応が、こうした問題をめぐる重要な関心事であることを理解した。

コース・ディスカッション・セッション４

ねらい

a. JPYより高知県に関する基礎知識を得る。
b. CD-07「防災教育とツーリズム」及びCD-08「防災対策」で共通ディスカッションを行い、互いの経験を共有する。

活動

a. CD-08のJPYが、黒潮町と土佐清水市の現在の状況（人口統計、地質、過去の災害、防災計画など）についてプレゼンテーションを行った。
b. CD-07とCD-08で、防災を学んだ。

成果

a. PYは、黒潮町と土佐清水市の現在の懸念事項や、防災のための主な提案（例：防災計画、津波避難タワー、建物の移転）について認識を深めた。
b. 両CD共、高齢者や障害者、外国人に関する懸念を共有しており、これはCDセッション１と２のシナリオに似ているものであった。

(4) サマリー・フォーラム（成果報告会）

SDGs、仙台防災枠組、潜在的な協力関係を踏まえたプロジェクトを立案する活動で得られた経験をまとめ、オンライン・セッションから続く学びを振り返った。体感という意味では、避難訓練などがいつか直面するかもしれないストレスや困難を肌で感じる機会となった。これらの学びは、高知市立浦戸小学校の子供たちが地震や津波の際に防災ボトルなどの道具を携えて、自分たちの力で３分以内に学校から避難する方法を披露した高知市での経験と相通じるものがあった。同様に、逆境に立ち向かい、順応することで勇気を身につける術として、ジョン万次郎の精神（決してあきらめない、新しいことに挑戦する、人のせいにしない）を地元の人々がどのように教わっているかも学んだ。

その関係で、ウクライナやガザで発生したような人災への対応能力を重く見るCD-08では、平和を重視する人間性が大きな関心事とされた。最後にPYは、リスクの低い国もあるものの、誰もが困難な時に他者に貢献できること、幼少期から防災教育に触れることは有益になり得るということを学んだ。防災について語ること（災害を想定すること）によって、心身共に備えることができると結論付けられた。

(5) 自己評価（PYによるフィードバック）

本コースに立ちはだかる主な課題は以下の３点であった。(a) 抜粋せざるを得なかったコース・ディスカッション、(b) 専門知識のレベルの違い、(c) PY間の英語コミュニケーションスキル

a. 当初、半数以上のPYは本CDが第１希望ではないと認識していたため、テーマへの関心は低かったのだが、浦戸小学校で児童や消防士との訓練を行った後、PYたちの興味は大きく変わった。
b. 専門知識のレベルが異なるため、当初はコースでのディスカッションに関心がなく、自分のキャリアは災害リスク削減には全く役立たないと考えていたPYもいた。このような考えが覆され、ビジネスの取組、法律、国際協力が、以前は気づかなかったような形でどのように役立つかを学んだ。
c. 英語を母国語としないPYにとって、英語でのコミュニケーションは大きな課題であり、一部のJPYの主な懸念であった。そうしたPYに対しては、高知県の実行委員と協力し、地元コミュニティとOPYの間の通訳をする機会を提供することで、常に自信を持たせることができた。このような行動が自発的に行われ、自信を獲得し、自身のスキルを見直す機会となることが確認された。

(6) ファシリテーター所感

PYは、共通の課題（英語での明瞭なコミュニケーションなど）に直面しながらも、災害のリスクにさらされながらどのように備え、どのように軽減し、どのように自分自身の生活を送るかという新たな展望を得ることができた。本CDで受けた訓練を、実践する日が来てほしくはないが、役に立つことを願っている。

こうした努力は、寄港地の方々、とりわけ高知県の実行委員会のすばらしい活動なしには不可能であったことを申し添えたい。

ファシリテーター: Mr. Maximiliano Montoya González

(1) ディスカッションの目的とねらい

目標

PYに対し、必要な知識、スキル、手段を携えて持続可能な開発に貢献し、地域社会の環境保護を推進することを後押しする。本CDを通して、PYは以下の事項を修める。

a. 観光と環境の関係を理解する。
b. 持続可能な観光開発における課題とチャンスを見つける。
c. 地域社会における持続可能な観光と環境保護を促進するための戦略を策定する。
d. 持続可能な観光と環境保護の取組を実施するための行動計画を策定する。

ねらい

本CDのセッションを通して、PYは、環境保護と持続可能な観光に関する具体的なスキル、知識、経験を培い、身につける。 具体的には以下の通りである。

a. 観光が環境や地域社会に与える影響について包括的な理解を深める。
b. エコツーリズム、地域密着型観光、責任ある観光など、持続可能な観光開発のための成功事例や取組について学ぶ。
c. ステークホルダーの参画、プロジェクト管理、マーケティングなど、持続可能な観光イニシアチブを計画・実施するための実践的スキルを習得する。
d. 持続可能な観光、廃棄物管理、再生可能エネルギーなど、環境保護に向けた革新的な手法を探究する。
e. 異なる国や背景を持つPYと協力し、アイデアや経験を分かち合い、視野を広げ、将来の協力に向けたネットワークを構築する。

(2) 事前課題

a. 調査及び分析：PYは、観光が環境に与える影響、持続可能な観光開発における課題とチャンスに焦点を当て、自国の観光産業について研究・分析した。
b. 振り返りとディスカッション： PYは、観光と環境保護に関する自らの経験を振り返った。
質問：地域社会で環境保護と観光を促進する上で、どのような課題とチャンスがあるだろうか。

(3) 活動内容

A. オンライン交流

コース・ディスカッション・セッション1

ねらい

持続可能な観光の概念と、環境保護におけるその重要性を理解する。

活動

a. オープニング・エクササイズ：「自然を理解する」
b. 学習の経験に関するディスカッション： 積極的な参加について
c. アイスブレイク活動：「1人、100人、1,000人」積極的な傾聴によりお互いを知る。
d. 期待のネットワーク活動：各自のコースに対する期待を共有し、共通の関心事を確認する。
e. 環境保護と持続可能な観光への入門に関する基調講演
f. 事前課題に関する報告会：目的地及び環境への影響について
g. ワークショップ活動：プロブレム・ツリー・フレームワークをPYが選択した様々な目的地に適用

成果

PYは、様々な地域における観光が環境に与える影響を見つけ、持続可能な観光と環境保護を促進する戦略と成功事例を探った。

コース・ディスカッション・セッション2

ねらい

持続可能な観光と環境保護を推進する上で、地域社会の関与と協力が果たす役割を理解する。

活動

a. エナジャイザー：やる気と集中力を高めるマインドフル・ストレッチ及びハイタッチ
b. 課題報告会： ドキュメンタリー及びケーススタディ“Fyre Festival Unveiled”
c. 基調講演：「持続可能な観光と環境保護の推進における地域社会の関与と協力」
d. ディスカッション：問題の核心と目標に向けた原因分析

成果

a. PYは、持続可能な観光開発において、地元の利害関係者と関わる上での効果的なコミュニケーションと協力の重要性を学んだ。
b. PYは、地域社会を巻き込み、協力してもらうための実践的な戦略と行動計画を策定した。

コース・ディスカッション・セッション3

ねらい

PYが、持続可能な観光開発におけるリーダーシップのスキルと知識を身につけ、地域社会における持続可能な観光と環境保護の推進においてリーダーシップを発揮できるようにする。

活動

a. エナジャイザー：「持続可能なスナップショット」
各自、身の回りで持続可能性を象徴するものを１つ見つけるという課題が出された。

b. 課題報告会： Dr. Seussの“The Lorax”を鑑賞し、環境保護と青年のエンパワーメントに関する意識を高めた。

c. ディスカッション：「目的地について説明する」

d. 最後の活動：プロブレム・ツリー・フレームワーク

e. 青年のエンパワーメントとリーダーシップに関する基調講演

f. 活動のまとめ：「私の持続可能な誓い」
各自、CDのトピックに関する個人的な誓いを行った。

成果

PYは、船上プログラムの準備として、地域社会で持続可能な観光と環境保護を推進するための行動計画と新たな取組を策定できた。

B. 船上プログラム

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

双方向的でかつ魅力的な活動を通じて、環境保護と観光の接点について紹介する。

活動

a. アイスブレイク：「自己紹介」

b. エナジャイザー：「チキン・ラン」
競争の力関係を用いて、PYの集中力を高める。

c. ディスカッション：持続可能な観光と環境保護に焦点を当てた「プリビレッジ・ウォーク」

d. ディスカッション：各参加国における観光の現状

e. 持続可能な観光の実践と環境への影響についてのプレゼンテーション

f. 自国における責任ある観光の推進に関するグループ・ディスカッション：「私の影響と環境の基礎」

g. ワークショップ：「グリーン・プレッジ・ポスター」
プロブレム・ツリー・フレームワークをエンターテインメント産業のケーススタディに適用して、持続可能な観光のための解決策を促す。

成果

a. PYは、各参加国の観光産業における環境保護の重要性を理解した。

b. 環境保護と観光における主な７つの課題を見出し、検討した。

c. PYは、日本と各国における持続可能な観光について学び、観光とエンターテイメント産業に関連する具体的なケーススタディに取り組みながら、責任ある観光を促進する方法を探った。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

再生可能エネルギー、気候変動、持続可能な観光の関係を探る。

活動

a. エナジャイザー：「列に並ぶ」
チームビルディングを促す。

b. 気候変動対策における再生可能エネルギーの重要性についてのトピック及び議論の紹介

c. 再生可能エネルギーの現状と可能性に関するプレゼンテーション：「本CDの議論において再生可能エネルギーが果たす役割とは」

d. 各国における再生可能エネルギー利用促進の課題を見出し、議論するワークショップ：「エネルギー対決」
PYは、気候変動対策における再生可能エネルギーの重要性を探り、現状を理解し、様々な再生可能エネルギーの可能性を認識する。

e. グループ活動：「マイ・フィッシング・ビジネス」
持続可能な観光の意識を持つための釣りに関するゲームを通して、資源管理について学ぶ。

成果

a. PYは、気候変動対策における再生可能エネルギーの重要性を理解し、現在の様々な状況における再生可能エネルギーの現状と可能性について学んだ。

b. 自国での再生可能エネルギーの利用を促進する方法について検討し、議論した。

c. PYは、資源管理の重要性と、不適切な管理が様々な経済活動に与える影響について学んだ。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

都市環境における廃棄物管理の課題と、持続可能な観光への影響を探る。

活動

a. エナジャイザー：「結び目をほどく」
チームビルディングを高める。

b. 都市部における廃棄物管理の現状についてのディスカッション

c. 廃棄物管理の成功事例と革新的な手法に関するプレゼンテーション：廃棄物分別のケーススタディ

d. ワークショップ：「持続可能な廃棄物管理を促進するには」
持続可能な廃棄物管理の実践を地域社会で推進する上での課題について、グループ・ディスカッションを行った。

e. 都市環境における廃棄物管理と持続可能な観光への影響を理解するための「廃棄物監査」の活動

成果

a. 都市部における廃棄物管理に関する現在の問題につ

いて話し合い、理解した。
b. 廃棄物管理の成功事例と革新的な手法について学んだ。
c. 各国における持続可能な廃棄物管理の実践を促進する方法を検討し、プログラム中に発生する食品廃棄物に関する意識を高めるための取組を始めた。

コース・ディスカッション・セッション4

ねらい

青年のエンパワーメントをグローバルな持続可能性の課題と結びつける。

活動

a. エナジャイザー:「ダンスマスター」リーダーシップを高める。
b. 持続可能な未来を実現する上でSDGsの重要性についてのディスカッション
c. グループ・ディスカッションを行い、各国における青年のエンパワーメントを推進する上での課題を明らかにする。
d. 「持続可能なまちづくりへの挑戦」: 責任ある観光に関してCDで得た主要な原則を用いて、持続可能な都市を共同で建設する。この双方向型のまちづくりの課題は、持続可能な都市のコンセプトを実装するものである。PYの思考面のみならず身体面にも働きかける結果となり、チームワークを育み、持続可能な原則を実践的に適用することができた。
e. 総括及び高知県でのプログラムに向けたオリエンテーション: 持続可能な観光への挑戦

成果

a. 持続可能な未来を実現するにあたり、SDGsの重要性を理解し、話し合った。
b. 観光産業に焦点を当て、持続可能な都市を物理的に表現する課題に取り組む中で、習得した知識とリーダーシップ・スキルを活用することができた。
c. 自らの地域社会において青年のエンパワーメントを促す方法を模索した。

(4) サマリー・フォーラム(成果発表会)

オンライン、船上、高知県での経験を織り交ぜながら、本CDで得た洞察が語られ、このテーマに対する深い理解が示された。プレゼンテーションは知識を反映するだけでなく、環境保護と持続可能な観光への熱意を呼び起こすような取組に火をつけるものだった。

(5) 自己評価(PYによるフィードバック)

a. オーバーツーリズムがなぜ起こり、どのような結果をもたらすのか、そのメカニズムを理解することができた(日本)。
b. 一般的に、人々は自分たちが地域社会で何をしているのか意識していない。だからこそ、このコースは私にとって本当に感動的だった(インド)。
c. 持続可能な観光についてほとんど考えたことがなかったのだが、コース修了後、自然に対する見方が大きく変わった。これからは、環境保護に貢献し、自然を守る仕事がしたい(ソロモン諸島)。

(6) ファシリテーター所感

本CDのすばらしい面々に対して、感謝の意を表することができ嬉しく思う。一人一人の優れた気質、学習意欲、そして純粋な関心のおかげで、目的は達成されただけでなく、それ以上のものとなった。多様な文化的・職業的背景にもかかわらず、本CDは調和を保っていた。ベテランのPYも、初めてこのテーマに取り組むPYも、ディスカッションを楽しんだだけでなく、批判的思考スキルを身につけ、学び続けていた。グループの成長と献身を目の当たりにして、本当に感動した。環境保護と観光という課題に取り組む上での大きな一歩を踏み出した。

CD-10 自然と寄り添う暮らし

ファシリテーター: Mr. Ivan Vichr Nisida

(1) ディスカッションの目的とねらい

目的

a. 理論に裏打ちされた知識を提供することで、自然と人間の共存に関する考察をする。
b. エンパワーメントと表現のためのツールを提供することで、PYが将来の事後活動を通じて地元で独自にプロジェクトを展開できるようにする。

ねらい

a. SDGs目標6、7、12や、環境哲学・科学、そして基本的な知識に関しての主要な概念
b. プロジェクト・デザイン/デザイン思考/起業家ツール
c. 自己表現スキル(クリエイティブ・ライティング、ドローイング、プレゼンテーション、グループ・ダイナミクス)

(2) 事前課題

a. SDGs目標6、7、12について調べる。
b. 各国において模範となるプロジェクト・組織・個人について調べる。

(3) 活動内容

A. オンライン交流

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. PY同士が安心してつながれるクリエイティブな場づくり
b. 自然とのつながりについて、個人・グループで熟考

活動

a. 歓迎の言葉
b. CD-10の紹介
c. 主要な考え方、グループ内での合意形成
d. 自己紹介
e. アイスブレイク
f. クリエイティブ・ライティング

成果

a. 有意義な交流と安全で刺激的な環境作り
b. 理論的背景の構築

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

a. PY同士が安心してつながれるクリエイティブな場づくり
b. SDGsや関連トピックに関する知識の向上

活動

a. SDGsについてのプレゼンテーション
b. ディスカッション：「自然とは何か」「私の文化は自然とどのように関わっているのか」「私は自然とどのように関わっているのか」
c. プレゼンテーション：「自然の権利（第１部）」
d. クリエイティブ・ライティング・ワークショップ

成果

a. 自然という概念について多文化的視点をグループで認識した。
b. CDの重要課題と環境危機を分析するツールについて理解を深めた。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

a. 安心してつながれるクリエイティブな場づくり
b. 地図を用いた課題に対して可能な解決策の検討

活動

a. 環境面での危機の課題及び解決策についてのブレインストーミング・セッション（Jamboardアプリを使用）
b. ２人１組及びグループでのディスカッション
c. 船上プログラムへの準備

成果

a. 批判的思考ができるようになり、環境面での危機に対する理解を深めた。
b. より距離の近い対話の場を設けることによってグループの結束力が強化された。

A. 船上プログラム

コース・ディスカッション・セッション１

ねらい

a. オンライン・セッションでの主要概念を再確認する。
b. 理論的背景を掘り下げ、具体的な事例を紹介し、事後活動の重要性に言及する。
c. PY同士の絆を深める。

活動

a. プレゼンテーション：「自然の権利（第２部）」「人新世の概念」「パチャ・ママ」「エコビレッジ」
b. ２人１組及びグループでの意見交換
c. クリエイティブ・ライティング・ワークショップ

成果

a. PYに対して、自然との関係を分析するためのツール、知識、具体例を提供することができた。
b. ４つのアクション・グループを結成した。
c. クリエイティブ・ライティングによる自己表現のためのツールを得た。
d. グループとしての結束が強化された。

コース・ディスカッション・セッション２

ねらい

a. 環境に対する倫理について徹底的に考察を深める。
b. ストーリーテリングの力を発揮する。
c. プロジェクトの立ち上げ、チームワーク、事後活動に向けたマインドセットを育む。

活動

a. ストーリーテリング：自然保護区に住むニュージーランドPYの話
b. アクティビティ：「本当、嘘、分からない」では、PYは出された断定的な言葉に対して、自分の意見を説明した。
c. プロジェクト・デザイン：令和５年度「世界青年の船」事業に影響を与える、アクション・グループによる短期プロジェクトの作成(セッション２と３の間に実施)

成果

a. PYによる感動的なストーリーと自分自身をつなげる。
b. 環境に対する倫理についてよくあるジレンマを理解し、批判的思考を養った。
c. 安心して自由に意見を交換できる場ができた。
d. グループとして短期プロジェクトに向けて実務経験を積んだ。

コース・ディスカッション・セッション３

ねらい

a. ４つのアクション・グループによるプロジェクトの発表

b. 環境に対する倫理における価値の概念に関する紹介

活動

a. ストーリーテリング：第28回気候変動枠組条約締約国会議（COP28：2023年ドバイ）にアーティストとして出席したアラブ首長国連邦PYの話
b. アクション・グループによるプロジェクト・プレゼンテーションと質疑応答（３つのグループはSWYコミュニティへのインタビューを行い、残りのグループはCDのテーマについて議論を深めるためのニュースレターを作成した）
c. ゲーム：「私たちは誰を救うべきか」、PYは、グループの他のPYと交渉し、動物種や生態系保全のために仮想通貨を投資するよう求められた。

成果

a. グループとしてプロジェクトを実施する経験を積めた。
b. 自然を大切にする方法や、多方面に影響を与えるような決定を集団として行う場合の課題について理解を深めた。
c. グループの結束力を高め、チームワークの経験を積んだ。
d. 事後活動に向けた心構えを育んだ。

コース・ディスカッション・セッション４

ねらい

a. これまでのセッションの総括
b. 一連のセッションのまとめ

活動

a. 個人の総括とその共有
b. CD-10マニフェストの作成

成果

a. ７回のセッションを終えたCD-10の旅路を各自で総括
b. CD-10マニフェスト(主な学びをまとめた文書）を作成
c. チームワークの経験（30分で20人がマニフェストを作成）

(4) サマリー・フォーラム（成果発表会）

サマリー・フォーラムは２部構成で、CD-10からは全員が参加した。第１部は、CDの内容に関して主な学びが集中的に扱われた。核となるメッセージは「人間は自然の一部である」であり、PYは新しいプロジェクトや政策を立ち上げるにあたって、このメッセージが持つ意味合いについて議論し、自然との関係に適切な変化を促すための課題についても話し合った。PYは、この原則が日常生活では、ほとんど見られないことにも気づいた。自然は、人間生活の優先事項からかけ離れた象徴的な空間として認識され、そのほとんどが娯楽と結びついていることが多い。一方、牧野植物園や横倉山自然の森博物館など、高知県内のすばらしい場所を訪れ、自然と共存するという選択肢が与えられた。そして自然に依存していることをきちんと理解するには、科学が重要であることが分かった。CD-10では、自然とさらに調和のとれた関係を築くには、教育が大切だと考えている。つまり信頼できる人文科学のカリキュラム（環境倫理）が、とりわけ青年にとっては重要である。その他の有望なアイデアとしては、自然について学び、自然とつながる国際交流、社会的な絆を強化する世代間メンターシップ、地方活性化のための「自然大使」を務める若い起業家への投資などが挙げられた。

第２部では、より広くSWYの経験を取り上げた。PYは、自分たちの生活にどのような影響があったかを説明するために、(1)新しい文化や視点へのアクセス、(2)自己成長、(3)つながりの価値、という３つの面を提示した。本事業の持つ力についての説明として、CD-10のPYの体験談が紹介された。

最後に、PYは次のステップがまだ明確でないことを認めつつ、どのような道を歩むにしても伴うスキル、エンパワーメント、自己成長について言及した。

(5) 自己評価（PYによるフィードバック）

PYは非常に好意的な感想を述べた。理論的要素、実践的活動（ゲームやグループ・ダイナミクス）、プロジェクト主体の手法の組み合わせが高く評価され、仲間と分かち合い、創造的であるには、安全で快適な環境が重要であると強調された。

a.「他の人たちが自然をどのように捉えているかを知ることで、なぜ自然が私たちの生活にとって重要なのかを改めて考えることができた。また、理論や様々な事例を知ることで、自然の価値を実感することができた。」
b.「私たちは皆、文化や家族、習慣によって、自然とつながる方法が異なることを学んだ。自然は私たちの一部である。」
c.「自然に親しむ生き方は、必ずしも森のような自然の場所でなくても、自分の中でできることを学んだ。」
d.「自然に親しむ、ということは状態ではなく、考え方である。」

(6) ファシリテーター所感

CD-10の旅路をファシリテートできたことは大変光栄であり、喜ばしい限りであった。当初から、PYは提案された活動へ参加することに前向きで、自分たちの知識と創造性を惜しみなくグループに還元することで、懐の深さを見せてくれた。

核となる目的は達成されたと思う。人類と自然についての力強い考察に火をつけることができただけでなく、より深い研究のための新しい扉を開くこともできた。このような交流により、環境問題に対するPYの視野を広げ、各自の国において、より包括的で長期的なアプローチが可能になることが期待される。

強調したいのは、信頼、優しさ、尊敬に基づいた、グループの結束力の強さだ。この安心できる環境のおかげで、PYは、引っ込み思案や言葉の壁があったとしても、自分の意見を述べることができ、大きな成長を遂げることができた。

その過程において、Ex-PYとして、CD-10のPYにはそれぞれの旅路があることを理解していた。そのため、個人単位またはグループ単位でPYをサポートするのに苦心した。同時にPYからは、私たちと自然との関わり方やファシリテーションの技術について、貴重な教訓を与えられた。

CD-10のPYが事業終了後も、事後活動の精神を追求し、より多くの人々の生活に影響を与え続けられることを祈念している。

最後に、内閣府、「世界青年の船」事業、全ての事業関係者、そして貴重な機会を与えてくださった高知県の皆様に深く感謝申し上げる。SWYは、青少年に力を与え続け、私を含め数え切れないほどの人生を変えてきた。本当にありがとう。

1.2. 地域実践活動

地域実践活動の目的

地域実践活動では、これまでの事業内でPYが学んだ知識や経験を基に、地域が抱える社会課題の解決に向けたプロジェクト実践を行う目的で、今年度の事業より追加されたプログラムである。SDGsを始めとする社会課題に取り組む地域NPOや学校、企業などと協力しながら、具体的なプロジェクトのプランニングを行い、実際に現場に入ってプロジェクトを実践するまで一連の過程の協働作業を行う。

地域実践活動では、ディスカッションにとどまらず、課題解決能力を養うことを目的とする。高知県受入実行委員が事前に企業、学校、NPOなど様々な団体の関係者に地域が抱える課題をインタビューし、地域実践活動における課題を設定した。

地域実践活動日程表

日程	時間	プログラム
2月10日 （土）	9:45-10:00 10:15-11:15 11:45-13:15 13:30-15:30 14:00-15:10	寄港式 ・岡村昭一高知県文化生活スポーツ部長 高知県知事挨拶代読 ・谷脇由人高知市総務部副部長 高知市長挨拶代読 ・ザンビア YL 挨拶 ・ギフト交換 ・記念撮影 オリエンテーション 昼食 オープンシップ Hello SWY ・開会 ・各国文化紹介 ・代表 PY によるよさこいパフォーマンス ・閉会
2月11日 （日）	8:30-9:00 午前 - 午後 16:00	下船 CD ごとに関連施設訪問・活動 帰船
2月12日 （月）	8:30-9:00 午前 - 午後 16:00	下船 フォーラム ・CD-01 及び CD-02（於 こうち男女共同参画センター「ソーレ」） ・CD-03 及び CD-04（於 オーテピア） ・CD-05 及び CD-06（於 オーテピア） ・CD-07 及び CD-08（於 高知市文化プラザかるぽーと） ・CD-09 及び CD-10（於 高知県立牧野植物園） 帰船

日程	時間	プログラム
2月13日 （火）	8:30-9:00 午前 - 午後 16:00	下船 CDごとに関連施設訪問・活動 帰船 ※CD-07外泊（於 土佐ユートピアカントリークラブ）
2月14日 （水）	8:30-9:00 午前 - 午後 16:00	下船 CDごとに関連施設訪問・活動 帰船 ※CD-08宿泊（於 土佐ユートピアカントリークラブ） ※CD-09宿泊（於 東洋白浜リゾートホテル）
2月15日 （木）	8:30-9:00 午前 - 午後 16:00	下船 CDごとに関連施設訪問・活動 帰船
2月16日 （金）	午前 11:45 13:00 13:30-16:20 17:00	成果発表準備 昼食 下船 自由時間（於 イオンモール高知） 帰船
2月17日 （土）	9:30-11:45 11:45 13:30-15:30	成果発表会リハーサル 昼食 成果発表会 ・開会 ・成果発表（8分×10CD） ・代表PYによるよさこいパフォーマンス ・高知県受入実行委員からのメッセージ ・桑名龍吾高知市長挨拶 ・杉尾智子高知県受入実行委員挨拶 ・閉会 出航

PYからの報告

＜CD-01＞

CD-01は「ジェンダー平等」をテーマに、高知県の諸課題をジェンダー平等の観点から考察した。

２月11日は、がっかり名所のはりまや橋、高知よさこい情報交流館、日曜市、高知城に赴いた。高知城では、鉄砲の説明や甲冑を着るなどの体験を行った。昼食にて多くのPYがひろめ市場で食べたカツオはとても美味しいと気に入っていた。

２月12日は、こうち男女共同参画センター「ソーレ」をCD-02と共に訪れ、午前は「ジェンダー平等」、午後は「共生社会の実現」をテーマにフォーラムが行われた。地元の中高生も議論に参加し、JPYが通訳する形で議論した。

２月13日は、高知工科大学に赴き、香美市長へ表敬訪問を行った。美酒百膳文蔵で昼食を食べた後、香美市立図書館「かみーる」でディスカッションを行った。５グループに分かれ、それぞれが高知県でのジェンダー不平等問題に対する解決案を英語と日本語それぞれで提示した。

２月14日は、オーテピアに赴き、ディスカッションを行った。昼食後は牧野植物園に赴いた。牧野植物園の四季折々の様子のビデオを見たり、咲き始めの桜を観察したりできた。特に温室の植物はすばらしかった。

２月15日は、香南市長への表敬訪問を終えた後、香南市立夜須中学校に赴いた。夜須中学校では、複数のグループに分かれ、OPYは自国のジェンダー平等の状況などについて、JPYが通訳として中学生に共有した。その後、中学生と一緒に昼食を取り、バドミントンやバスケットボールを中学生と楽しんだ。午後は、桂浜水族館に赴いた。CD-01のテーマが「ジェンダー平等」ということもあり、桂浜水族館のキャラクター「おとどちゃん」の描かれ方について、前日にPYのみで共有し、水族館に行かない選択肢を設けるよう高知県実行委員に要望した。その結果、JPY９名、OPY３名で水族館を訪問した。水族館では、秋澤志名館長との質疑応答の時間が設けられ、「おとどちゃん」ができた経緯、問題点や代替案などを館長と共有した。

＜CD-02＞

CD-02では、社会共生の実現のために必要なものについて考えるために、高知県でいくつかの学校や森林組合を訪問した。

まず初めに、香美市にある高知県立山田特別支援学校を訪問した。主に知的障害を持つ人が通う学校で、小、中、高等学校全てが含まれている。PYはグループに分かれてそれぞれの学校を訪問し、図工や体育、数学などの授業を体験した。また、学校に併設されている寮や、職業訓練施設を見学した。職業訓練施設は、工業や陶芸の作業場など多岐にわたっていた。これは、主に高校生を対象として、卒業後の社会参加に向けて生徒の得意な作業を伸ばしていくという点から、共生社会実現のための社会的包括を実感した。

次に、梼原町を訪れた。有名建築家の隈研吾氏が建築に携わった梼原町総合庁舎や、梼原町立図書館などを見学した。図書館では、開放的な建築を感じ、町民の交流の場として利用されていることから共生社会に貢献していることを実感した。次に、梼原町森林組合を訪問した。梼原町は、豊かな森林資源を活用した産業を行っている。ここでは、森林組合が今後産業を発展させていくために必要なことについて話し合った。新しい製品の導入や、労働者の男女格差縮小の必要性を提案した。包括的な雇用機会の提供が、共生社会における社会的流動性に貢献することを実感した。

最後にいの町立長沢小学校を訪問した。全校児童６人と小規模な学校であり、様々な特性を持った児童がいる中で、各々を尊重した学習や生活を送っていた。ここでは、給食を一緒に食べ、昼休みに縄跳びをして児童との交流を深めた。また、長沢小学校では、この地域に500年もの間伝わる本川神楽という舞を継承しており、児童全員が舞を踊る練習をしている。午後には、学校の隣にある本川新郷土館を見学し、児童たちが行う舞を鑑賞した。文化の継承が人のつながりをもたらしていることを実感し、共生社会における社会関係資本に貢献していることを実感した。

＜CD-03＞

高知県での寄港地活動中、英語でのディスカッションや地域との交流を通じ、教育と青少年のエンパワーメントについての貴重な洞察を得ることができた。特に地域住民が参加していたオーテピアでのディスカッションを通じて、質の高い教育の提供に関する学びを得られた。

まず異なる文化やバックグラウンドを持つ参加者とのディスカッションは、教育の多様性と柔軟性の必要性を浮き彫りにした。地域住民の多様な英語力を考慮し、JPYが通訳として奮闘する一方で、OPYは理解しやすい英語ではっきりと話すことで協力と柔軟な対応が見受けられた。

次に、香南市立大宮小学校訪問での実地体験から、伝統的な文化や地元の活動を通して学ぶことは、理論だけでは得られないリアルな洞察をもたらし、生徒及びPYの興味を引き出す手段として効果的であることが分かった。教育は単なる知識の伝達だけでなく、実践的な経験を通じて深められるものでもあると実感した。

また、高知県立高知国際中学校・高校訪問では、IB教育への理解が進んだ。生徒の好奇心や個性を尊重し、それをいかす教育が、学習へのモチベーションやエンゲージメントを高める鍵であることが明らかになった。これは、質の高い教育の提供において、生徒中心のアプローチの有益性を示している。

最終日のフォーラムでは、地域住民との質疑応答が、学生の意欲や将来への展望を理解する重要性を強調した。教育は、単なる知識の習得だけでなく、生徒たちが自らの夢や目標を見つけ、それを追求する手助けとなるべきであることを改めて認識した。

これらの学びを通じて、質の高い教育は個々の差異を尊重し、実践的な経験を通して深められるものであり、生徒たちが自らの学び舎であるコミュニティにおいて、自己成長と共に活躍できるような環境の構築が不可欠であることを実感した。

＜CD-04＞

CD-04は「青少年のエンパワーメント」をテーマに、高知県の様々な活動拠点に赴いた。まず、オーテピアにて、中学生から社会人までの様々な年代の高知県の方々とグループを組み、ディスカッションを行った。ディスカッションの内容は、「私たちにとって青少年のエンパワーメントとは」「SWYの事後活動で、JPYとして何ができるか」などを議論した。また、牧野植物園で子供ガイドを務めている姉妹や学生２人に青少年のエンパワーメントについて聞くことができ、自分にとっての青少年のエンパワーメントとは何かを考える機会になった。そして青少年のエンパワーメントを「若い人が目標に向かって努力することが出来る力を与えること」と定義し、グローバルな視点を持ち、地域の課題にフォーカス出来るグローカル・リーダーになることの重要性を学んだ。彼らの話を通してグローカル・リーダーになるために３つの事が必要だと考えた。１つ目は目標に向かって行動することである。これは牧野植物園を訪れた時に感じた牧野富太郎の夢を見続ける強さと持続性及び、地元の学校を訪れたときに感じた情熱を持つことと、チャンスを掴む準備をしておくことから必要だと考えた。２つ目は、伝統と文化の継承である。高知城や城下町を実際に訪れて文化や伝統を知り、よさこいや舞神楽の紹介、練習を通して学び、次世代につないでいくことから必要だと考えた。最後は、コミュニティの重要性である。訪問先の学校では、常に支えてくれる先生の存在、生徒の研究に対する地元の人々の支えがあった（牧野富太郎の家族は、研究を支えた妻や祖母がおり、同僚や友人の例としては、坂本龍馬に対する勝海舟の強力な支えがあったように）。

このように、高知県での活動を通して、あらゆる側面

からコミュニティを支援し、伝統・文化の情報源に青少年が触れることができるようにすること、また、目標に向かって行動するために不可欠な支援を青少年に提供することが重要であると学んだ。

＜CD-05＞

CD-05は、「地域の伝統と歴史の継承」をテーマに、高知県の文化や歴史に関わる様々な活動拠点に赴いた。

まず、戦国時代に長宗我部氏の居城であった岡豊城にて、地形を生かした山城の見学と甲冑体験を行った。甲冑を着てボランティアガイドの案内を聞きながら山城を巡ることで、かつて城の攻防がどのように行われていたのかなどの歴史を体験することができた。甲冑の着付けや、山城の攻防戦デモンストレーションで使用した家紋入りの旗の用意など、全てボランティアの方々がしてくださり、PY一同感銘を受けた。

次にCD-06と共同で、高知県内の中高生と共にフォーラムが開催された。まずプレゼンテーターから、高知県の問題点や、問題解決の成功事例の発表があり、それぞれの課題に沿った議題でグループごとにディスカッションを行った。その後に、高知市内及びオーテピア横にある空き地の利用方法に関する問題について、再びディスカッションを通して検討、意見提案を行った。

それから、高知県の文化・歴史への理解を深めるため、高知県内の様々な場所を視察した。具体的には、高知城と高知城歴史博物館、桂浜と桂浜水族館を訪れた。これらの訪問を通して、高知県の歴史と関わりの深い、山内家や坂本龍馬などの偉人について学びを得た。その翌日には牧野植物園を訪れ、地域の歴史や文化を継承していく若い力の重要性を実感した。

その後再びCD-06とフォーラムが開催された。地域実践活動を通して感じたこと・学んだことをいかしながら、あらゆる人が住みたくなるまちづくりと、そのために自分が今後できることは何か、というテーマに沿ってPY同士でディスカッションと意見を共有した。

最後に、梼原町を訪れ、有名建築家・隈研吾氏の建築の視察と、移住者の若手林業家の方々からお話を伺った。梼原町は地理的・歴史的な理由から、他者を受け入れる文化があるということで、伝統である林業が若い世代により、現代的な思想を取り入れつつ継承されている現場を見ることができ、CDのテーマに直結的な学びを得ることができた。

＜CD-06＞

CD-06は、「魅力あるまちづくり」のテーマで高知県の様々な活動拠点に赴いた。始めは、CD-05とフォーラムを通して高知県で今、課題となっている空き地の活用法をテーマに、高知県の中高生と共にディスカッションを行った。誰もが住みたくなる街はどんな街か、何が必要で求められているのかに焦点を当てた。出た案の１つが実際に高知県知事に提出されるということで、緊張感もあった。PYの１人は、「高知県が抱えている問題は、日本の他の地域も抱えている問題であると言えるため、自分事として捉えて次のアクションにつなげられるようにしたいと考えるきっかけになった。」と述べた。

桂浜水族館や牧野植物園にも訪れ、高知県の観光地も見ることができた。牧野植物園は特に山の奥に位置しながら、来場者が多く、園自体の活気とこだわりを感じた。

認定こども園あとむでは、園児の歌と演劇で迎えられた。園児たちが一生懸命に伝えようとする姿に勇気をもらった。英語を母国語とする教師が多いことから、園児はネイティブの発音に触れることができる。PYが壇上に現われた時も、泣き出す園児は１人もおらず、むしろ興味津々だった。英語教育、異文化交流に幼い頃から触れることで、多様性の価値観が身につくと感じた。最後の園庭で遊ぶ時間では、PYは子供に戻った気持ちで園児と触れ合った。

本山町では、旅館ツアーで、貴重な日本の伝統的な建築物に入ることができた。その後訪れた高知県立嶺北高校で、ターゲット層を含めた旅館の活用法、改造案を話し合った。地元高校生のリアルな声からニーズを調査しつつ、限られた時間の中で良い議論ができた。また、今はなかなか残っていない駄菓子屋を楽しんだ。隣には子供食堂があり、小さい町だからこそ住民のつながりが深く、そのつながりを大事にしているという話を聞くことができ、各施設の存在意義を理解した。町のパンフレットから、アウトドアが有名で盛んな町と分かったため、アクティビティも体験してみたいと思った。あいにくの天気であったが、人の優しさに触れることができた、温かい町だった。

＜CD-07＞

CD-07は「防災教育とツーリズム」のテーマで高知県の様々な活動拠点に赴いた。始めは、フォーラムを通して高知県で今、課題となっている防災をテーマに高知県の中高生も交えてディスカッションを行った。「防災×○○」を各チームで話し合い、防災の新たな切り口について学生たちと意見を交わしながら考えた。

その後、黒潮町という高知県の海沿いの町に一泊した。黒潮町は南海トラフ巨大地震に備えた町づくりを始め、町民を上げての防災への取組が行われている。その実例を地元で活動するNPO職員と共に町を歩きながら学んだ。また、地元の高校生とチームを作り、町で地震が起きた時を想定した避難訓練も行った。実際の避難訓練は、日本語表記しかない看板や、正確な地図などが無いことにより、OPYにとっては難しい避難の時間となった。この避難訓練は、実際に日本語が使えない人、黒潮町に土地勘が無い人が避難をすると、どうなるのかを体感する時間となった。

その後は高知大学にて地理学を起点に地震のサイクル

について学んだ。地層を読むことを通して、地層の動きの解釈方法を学んだ。世界でも有数の地層を保管する倉庫の見学し、地球の成り立ちを地理学として学んだ。また、高知県出身者が開拓した地層を掘る新技術を搭載した機械を作る会社を見学した。高校生や地元の人、また研究者や会社の技術者など様々な視点で防災を見ることができる時間となった。

成果発表会では、高知県で学んだ防災に関する経験を持ち、備えることの重要性、また今後の高知県に対してPY視点から提案を行った。提案の中には、地元の高校生が最も関心を寄せた防災タワーを活用するミュージアムの建設もあり、今後の高知県の発展に寄与する時間となれば嬉しく思う。今回の地域実践活動では、防災を多様な視点で学び、理解する機会となった。OPYも日本独自の土地柄と防災への意識を感じ、日本の新たな側面を知る時間となった。

＜CD-08＞

２月12日は高知市文化プラザ「かるぽーと」にて、午前・午後に分けて、２つのテーマでディスカッションを行った。このディスカッションには、日本を含む14か国のPY約40名と、高知県にゆかりのある現役の中学生から大学生までが混ざり、１日を通して活発な議論が交わされた。午前のディスカッションは、黒潮町における防災と観光の融合に関するものであり、午後のディスカッションは、「ジョン万次郎の人生から学ぶ３つの精神」に焦点を当て、チャレンジ精神、自ら決断する精神、決してあきらめない精神について探求した。

続いて、２月13日は午前９時前に高知市立浦戸小学校を訪れ、全校生徒の温かい歓迎を受けた。全校生徒は49名であり、１、２年生からは「よさこい踊り」や「けん玉」を教わり、その後は周辺の空き家地域を散策し、地域の過疎化の実情を肌で感じた。空き家エリア、桂浜、そして高台経由の避難経路を通って小学校に戻り、避難経路の整備状況や非常食の試食、避難訓練を行った。避難時間は３分25秒であり、目標の３分以内には届かなかったが、津波到達時間の早さと防災の難しさに改めて気付かされた。最後に、児童から自己紹介のポストカードをいただき、この日の活動を終えた。

２月14日は高知県立清水高等学校を訪れ交流を行った。午後には、ジョン万次郎に関する講義を受けた後、ジョン万次郎ゆかりの地を視察し、その結果と感想を共有した。また、フランスPYによる自国に関するクイズや地元の活動報告、生徒による自由研究の発表などが行われた。さらに、ジョン万次郎資料館も訪れ、その歴史と功績に触れた。

最後に、２月15日の午前中に、土佐清水市立足摺岬小学校を訪れ、足摺岬の魅力とツバキ生息数減少に伴う保護活動について小学生からプレゼンテーションを受け、最後にリコーダーの演奏を聴いた。午後には、土佐清水市立清水中学校を訪れ、地元の生徒たちと交流を深めた。清水中学生が英語で司会を行い、土佐清水市長の挨拶や津波とジョン万次郎に関する講義、そして代表生徒による英語でのスピーチが行われた。途中、土佐清水市立清水中学校の生徒による英語でのプレゼンテーションや質問があり、英語で交流した。

＜CD-09＞

CD-09は「環境保護と観光」をテーマとし、高知県内の自然環境と観光産業を組み合わせた場所や施設を中心に訪れた。

まず、CD-10と合同で参加したユースフォーラムにて、高知県内の高校生と共に高知県内の自然環境をいかした観光産業、そして自然と私たちの暮らしのつながりについて意見を交わした。会場は牧野植物園で、資料館の豊富な展示を見たり植物園を散策したりしながら、高知県出身の植物学者・牧野富太郎の生涯と彼が熱意を注いだ植物の世界に魅了された。

続いて訪れたのは、香美市にある鍾乳洞「龍河洞」である。日本三大鍾乳洞の１つであり、国の指定史跡天然記念物にも登録されている。実際に鍾乳洞の中に入って間近で見るのが初めてのPYも多く、ライトアップなどの工夫も楽しめた一方で、掲示板の英語表記が無いことや、安全面や自然環境保護に関する事前の説明が不十分であるなど、観光地としての課題も伺えた。

高知市からバスで２時間程、東の端にある室戸市にも訪れた。まず高知県立室戸高校の生徒たちによるガイドの下、室戸ユネスコ世界ジオパークを散策した。高校生と交流しながら、見慣れない植物や美しい岩肌、穏やかな太平洋の水面などありのままの自然を満喫した。

最後に、同じく室戸市内の廃校をリニューアルしたユニークな水族館兼ウミガメ研究施設である、室戸廃校水族館を訪れた。館長より水族館設立の背景や理念、地域活性化の効果に関するお話を伺い、室戸市にとって重要な産業である漁業を維持するために地元の方々が試行錯誤していることや、県内外から当水族館を訪れる観光客に良い影響を与えていることなどが分かった。PYからは、魚の展示方法や資料説明について課題を指摘する声も少なからず挙がり、動物倫理と環境保護、地域活性化の良いバランスを見つける議論を深める機会となった。

＜CD-10＞

プログラム２日目に牧野植物園を訪れた。この日の午後、地元の学生も交えてディスカッションを行った。印象的だったのは、１人の学生がプレゼンで提起した、若者の高知県離れについての原因と解決策を話し合った時間だった。原因は都会と比べてエンタメ性や進学先が少ないことなど予想できるものも多かった。根本としては、

高知県自体に魅力を見出すことができる環境が無いということで、新鮮な発見だった。地域の人、観光客などの地域外の人、様々な年齢層の人など、多くの人が集まれる施設のようなものが、高知県自体に魅力を見出すことができると思った。そのため、今回のディスカッションで使用した牧野植物園に併設された会議室のような場所を有効活用できるのではないかと考えた。

３日目は梼原町に行き、隈研吾氏の建築物を体験した。“Losing Architecture”というフレーズに初めて出会ったが、とてもよく彼の建築を言い当てていると感じた。確かに、彼の建築は背景の自然に吸収されていて視覚的な主張性は皆無だ。しかし、「その背後にあり彼の建築が秘めている哲学的主張は他のどの建築物にも勝るものだ。」と述べるPYもいた。彼の建築を美しいと思えるのなら、PY自身も自然と共に生きることを美しいと思えるはずだと感じた時、CDのテーマがより身近に感じられることに気付いた。

５日目は地元の学生と一緒に高知県立のいち動物公園を訪れた。あるPYは動物園という存在に疑問をもっていたので、感情的に難しいものがあった。学生たちは楽しそうにしていたのでシリアスな話題に持っていくことができなかったが、PY自身が抱いていた疑問がある。それは、「動物園に閉じ込められている動物は果たして幸せなのか。」という問いである。１人のPYはこの話題を話したいかを学生に質問していた。そして、学生は話したいという意欲をみせていた。これを聞いたときに、自分が思っている疑問はたとえシリアスなものでも下の世代と意見を交わすことにオープンであることの重要性を認識した。

1.3. サマリー・フォーラム

サマリー・フォーラムはオンライン交流から船上プログラムにおけるCDを通してPYが学んだこと、プログラムを終えた後にどのようなことを実行するのかをCD毎に発表する場である。

プログラムを通して、学びと感謝を伝えるための時間となった。サマリー・フォーラムは14か国の言葉での挨拶で幕を開けた。このプログラムの多様さを再認識することができるオープニングとなった。そしてCD毎に下記のプレゼンテーションが行われた。

CD-01「ジェンダー平等」は、政治・働きがい・教育の三つの柱におけるジェンダー平等促進のための具体的な対策について、各国の取組を元に考え発表した。寄港地活動中の実例を集め、成功体験や改善点を共有した。

CD-02「共生社会の実現」は、出身や身体の特徴に関わらず互いを尊重できる社会について発表し、若者として何ができるかというメッセージを伝えた。

CD-03「質の高い教育の提供」ではUNESCOのケーススタディをいかしたプロジェクトをグループごとに作成し、これからの教育について議論した成果を報告した。

CD-04「青少年のエンパワーメント」は、青少年にまつわる社会的課題について議論した結果と、チームとして「青少年のエンパワーメント」の定義がどのように変化したのかについて発表した。

CD-05「地域の伝統と歴史の継承」は、テーマに関連した活動をし、伝統を継承する意義や課題、その解決策を共に考えた成果を報告し、学びを総括する“Cultureful”というオリジナルのキーワードを共有した。

CD-06「魅力あるまちづくり」は、寄港地活動での気付きを基に、持続可能かつ魅力あふれる街を作るのに必要なことや、ディスカッションを通じて得た学びについて、劇を通して紹介した。

CD-07「防災教育とツーリズム」は、黒潮町の生徒と一緒に避難訓練を行い避難経路に対する問題解決について議論した結果を報告した。

CD-08「防災対策」では、避難訓練や土佐清水市の小中高生との交流などを通して考えた、予測される災害への当事者意識を持たせつつ、効果的に防災対策を講じるためにはどうするべきかを伝えた。

CD-09は「環境保護と観光」では、環境保全とオーバー・ツーリズムのバランスを取ることを目指し、観光保護の重要さと地域を支える観光の理想的なあり方について考えた結果を発表した。

CD-10「自然と寄り添う暮らし」では、人間が自然と関わるときの姿勢や、自然と私たちの現代の生活をどのように近づけるかについて、ディスカッションや寄港地活動を通じて得た知見と展望を共有した。

CD-05とCD-06の間には「スペシャル・イベント」と題し、まずPYの手形で装飾したバナーを披露した。次にプログラムの思い出を振り返るビデオが上映された。たった１か月前の出来事が遠い昔に感じられ、この仲間と過ごした時間の濃密さとPYが築き上げた絆の強さを感じさせられた。

フォーラムの締めくくりは、“We are the World”の歌唱であった。有志のバンドや寄港地からの出発の際などに度々歌われ、多くのPYにとって思い出深い曲である。各国から１名ずつステージに上がりマイクを持ち、サビを全員で熱唱した。背景には、PYから集めた「あなたにとってSWYとは」のスライドショーを流した。「家族」「一期一会」「人生で一番の選択」などの回答が集まり、SWY

がPYにとってどれほど大きな意味のある経験となったかが伺えた。会場は一体感に包まれ、サマリー・フォーラムは大盛況の中、幕を閉じた。世界中から集まった多様な背景を持つPYの知見や吸収力、想像力が融合することで、大きな力になることを示したサマリー・フォーラムとなった。

2　地域訪問活動

（1）京都府

２月１日から２月３日の３日間に渡り、京都府での地域訪問活動を実施した。京都府の活動では舞鶴市、福知山市、綾部市、宮津市、京丹後市、伊根町、与謝野町の７つのグループに分かれた。

地域訪問活動日程表

日程	時間	プログラム
２月１日 （木）	9:30-10:20 10:30-11:30 11:45 13:15-16:30 17:00	寄港式 ・７市町テーマの歓迎ビデオ上映 ・高屋奈尾子京都府中丹広域振興局長挨拶 ・フランス NL 挨拶 ・ギフト交換 ・記念撮影 各市町によるオリエンテーション 昼食 自由時間 帰船
２月２日 （金）	9:00 午前 - 午後 17:00	下船 グループごとに施設訪問・活動 帰船
２月３日 （土）	9:00 午前 - 午後 17:00	下船 グループごとに施設訪問・活動 帰船 出航

PYからの報告

＜京都① 舞鶴市＞

PYは舞鶴引揚記念館にて、当時悲痛な経験をされた方々の残酷な惨状や、引き揚げに尽力された功績を、自らの目で見ることで引き揚げの史実を学んだ。レクチャーや講師とのディスカッションを通して、平和な世の中が持つエネルギーの豊かさについて再認識した。舞鶴市長との対話を通して、平和の大切さをPYのような青年たちが主体的に発信していくことの重要性、より良い未来への国境を超えたビジョンを共有した。さらに、ワークショップを通して、舞鶴市の名産品であるかまぼこ作りや天ぷら作りなども体験し、特にOPYが日本文化に触れる貴重な時間となった。

＜京都② 福知山市＞

PYはまず福知山城を訪れた。福知山市は明智光秀のお膝元として発展してきた街である。PYは、明智光秀の平定から失脚、その後の発展まで各種展示物を通して視覚的に学んだ。また、近代の福知山市の歴史を学ぶため、福知山鉄道館フクレルを訪問した。福知山市は、鉄道と共に発展してきた街でもある。この施設は2023年にオープンした新しい観光施設である。ここでは鉄道に関する展示物を通して近代の発展を学んだほか、現代のデジタル技術を生かした体験型の展示ブースでも、楽しく福知山市の発展を理解することができた。

＜京都③ 綾部市＞

PYは自然の豊かさを生かしたゲストハウスを運営している講師からレクチャーを受けた。使われなくなった古民家をいかした居住環境の整備や、雪かきや自然散策など、田舎ならではの楽しみ方ができる観光地としての活用法を学んだ。また、節分体験として、実行委員が鬼

の面を被り、PYが鬼に向けて豆まきをすることで、特にOPYは日本文化を体験できた。ワークショップでは、日本茶の試飲、昼食には綾部市で生産された食品を使用した精進料理を食べ、日本文化を堪能した。また、綾部市長への表敬訪問では、市が抱える人口減少の問題や、自然の豊かさを観光産業にどういかしていくか、京都府内や大阪府からの交通の便の良さをいかした綾部市への観光客を増やすためにはどうするべきなのかなど、様々な質問が飛び交い、とても充実した時間となった。

＜京都④ 宮津市＞

PYは天橋立エコツーリズム・ガイドの会から、天橋立保護に向けた環境保護とエコツーリズムについてのレクチャーを受け、天橋立における保全活動への理解を深めた。例えば、『天橋立付近では新鮮な貝を採ることができるが、貝を採る上で餌となる海老を獲りすぎてしまうと餌がなくなってしまう。しかし、貝に対しての需要が大きいので、漁師は貝を採ろうとする。餌となる魚をなくさないように、漁師の方々に合意を得つつ漁をうまくコントロールしている』といったようなことである。またPYは、例えば漁師が自前のレストランを持ち、お客様に今食べた魚の背景にある物語を話し、普段何気なく食べている海老の物語を聞いてもらうことで魚の大切さを知ってもらうといったような、環境保護に向けて地域に住んでいる人と協力をする必要性についても学んだ。このようなレクチャーや宮津市長とのディスカッションを通じてPYは環境保護やエコツーリズムの大切さを学んだ。併せて、意見の異なる人たちが、どのように合意形成を図るかについても学ぶことができた（特にCD-09とCD-10の環境に関するトピックにも関連する考え方である）。

＜京都⑤ 京丹後市＞

PYは、数々の織物の中でも絹織物を製作する丹後織物工業組合を訪れ、1,300年以上も磨かれてきた京丹後ちりめんができるまでの工程を見学した。PYは絹という、身近なようで奥の深い織物の製造工程を目で見て体感することで理解を深めた。丹後織物工業組合にお礼の言葉を告げた後は山陰海岸ユネスコ世界ジオパークとして登録されている琴引浜へ向かい、非常に限定された条件及び環境にしか存在しない鳴き砂について学ぶと同時に、鳴き砂の保全のためのアプローチについて学んだ。この訪問活動は、PYにとって鳴き砂についての理解を深めるものとなった。

＜京都⑥ 伊根町＞

PYは海蔵寺を訪問し、日本の瞑想方法である「座禅」を体感し、日本文化への理解を深めた。同時に、僧侶からのレクチャーを受け、仏教の精神統一や、悩みに向き合うことへの理解も深めた。昼食には伊根町で取れた魚を使った地元の料理を堪能した。その後、PYはフェリーに乗り、海から伊根町の舟屋の街並みを一望し、絶景に圧倒された。また、舟屋ハウス・ツアーに参加し、１階が船着場、２階が居住地という伊根町の船屋ならではの建築を見学した。加えて、伊根町の特産品であるガラス玉作りを体験しながら、PY間の友好も深めた。伊根町観光協会職員から、伊根町におけるオーバーツーリズムによって引き起こされる問題についてのレクチャーを受け、観光問題についての問題意識を深め、解決策についても議論を交わした。

＜京都⑦ 与謝野町＞

歴史的に重要な道であるちりめん街道をめぐり、ちりめんの機械を見学した。また、歴史的建物であり重要建築物の１つである旧尾藤家のツアーに参加し、和風と洋風が一体化されている建築技術を体感した。また、PYはワークショップに参加し、与謝野町で盛んに生産される絹を使用したミサンガとコースターを作成した。組紐台という機械を使用して作成し、絹の町ならではの独自の作り方を体験した。また、町の課題である観光客の勧誘に関して、ディスカッションを行った。OPYの自国での事例をアイデアとして取り入れ、PRを通して町の魅力を伝えることを提案し、現地の方と意見交流を行った。

(2) 兵庫県

２月６日から２月８日の３日間に渡り、兵庫県での地域訪問活動を実施した。兵庫県では７つのグループに分かれて活動した。

兵庫県、淡路島での活動のテーマは“Origin”であった。淡路島は瀬戸内海東部に位置している島で、淡路市、洲本市、南淡路市の３つの市から成っている。今回PYは、日本始まりの島である淡路島ならではの体験や地域で活動している方々との対話を通じて、様々な“Origin”に触れた。また、自分の原点を見つめ、これからの生き方のヒントを探ることを目的に地域訪問活動が始まった。

地域訪問活動日程表

日程	時間	プログラム
２月６日 （火）	9:30-10:30 午前 – 午後 16:00	下船 グループごとに施設訪問・活動 帰船
２月７日 （水）	9:30-10:30 午前 - 午後 16:00	下船 グループごとに施設訪問・活動 帰船
２月８日 （木）	9:00 10:30-12:30 13:00-16:00 17:00	下船 淡路グローバル・ギャザリング（於 淡路夢舞台国際会議場） ・山中昌幸兵庫県受入実行委員 開会挨拶 ・北守人兵庫県県民生活部男女青少年課長挨拶 ・ギフト贈呈 ・門康彦淡路市長挨拶 ・アルゼンチン YL 挨拶 ・記念撮影 ・淡路グローバル・ギャザリング（ワークショップ） ・宮地朱音兵庫県受入実行委員 閉会挨拶 昼食・自由時間（於 道の駅あわじ） 帰船 出航

PYからの報告

２月６日に兵庫県淡路島に到着したPYは７つのバスグループに分かれ、それぞれの活動を行い、３日目には淡路島での活動がPY自身の価値観や考え方にどのような変化があったかを共有した。

１日目は前半と後半に分かれて活動した。前半は国生みの神話で有名な伊弉諾神宮を訪問した。はじめに神主から、鳥居や石碑の説明があった。伊弉諾神宮の鳥居は２つあり、外側の鳥居が内側の鳥居よりも大きく作られているのは、敷地に入ったときに神様を遠くに感じるためである。伊弉諾神宮は日本のおおよそ中心に位置しており、東西南北に主要な神社、例えば、出雲大社や伊勢神宮が対角線上に位置している。これは偶然とは考えづらく、日本人は2000年前から地球が丸いことを知っていたという。なかでも印象に残ったのは、「君が代」の作者が不明であるにも関わらず、日本の国歌として今もなお国民から愛されているということだ。また、君が代の「君」は他者を思う気持ちに由来していると知り、JPYにとっても新鮮な解釈だった。

神宮の案内後は、神事に参加した。OPYはその中で催された神楽を新鮮に感じ、感動したようだった。JPYの中でも神事に参加したことがある人は少なく、OPYから意味を問われても答えられない悔しさはあった。神事や神宮の意味など、日本人にとっては当たり前で意味を考えることがないことについても、海外から来た人にとっては、特別で意味を知りたいと、意欲が強いことに改めて気付き、勉強不足であることを痛感したJPYもいた。事前学習を行うなど、訪問先に関する予備知識を得ることを今後の活動で実施しても良いのではないかと感じた。神事に関しては、宗教の戒律上参加できないOPYも多く、普段の生活で初詣や七五三といったイベントで宗教に触れるものの、そこまで宗教を意識していなかったJPYとしては、改めて宗教について考えるきっかけとなった。多くのPYからは、何千年もの間伝統を継承していることや、神宮が自然と調和している様子、また案内をした人々から醸し出されるホスピタリティに関して肯定的な意見が多く聞かれた。

後半はそれぞれのグループごとに、パルシェ香りの館、北淡震災記念公園野島断層保存館、淡路人形座を訪問した。パルシェ香りの館では、淡路市教育委員会職員より、主に考古学の観点から日本の歴史についての講義を受けた。ナウマンゾウなどの化石に触れ、火力を高めるために用いる送風装置である鞴（ふいご）などの道具を使う体験を通じて、日本の歴史を肌で感じた。また、線香を始めとした香りの歴史について学び、淡路島が線香の産地であることを理解した。古い歴史を紹介するだけではなく、線香の文化を広める活動にも取り組んでいることを学んだ。北淡震災記念公園野島断層保存館は阪神淡路大震災を引き起こした原因である野島断層を保存している施設である。ここでは野島断層を実際に見学し、断層の迫力に衝撃を受けた。いつか起きる可能性が高い大地震を身近に感じるとともに、日頃の準備の大切さを実感した。また、展示の中では、地震が起きた後の人々の暮らしの様子を切り取った写真や、傾いた家屋、激しい揺れの影響で食

器が地面に散乱した様子を目の当たりにした。地震の際に住民間で助け合った様子も記されており、災害時に対応できるコミュニティの必要性も感じた。ニュージーランドやトルコなど、実際に大地震を体験したPYからは、教育施設の重要性を意識する声も多く聞かれた。一方で、英語の説明が不足しており、教育施設における多言語対応の必要性も感じた。なかには地震への恐怖を施設で思い出す人もいた。災害や戦争に関連する施設については、トラウマを引き起こす恐れもあるため、改めて、意向確認を行う必要性も感じた。一方で、災害を経験していない人にとっては、展示物だけだと実際の災害のイメージや人々に与えた心理的影響を推察することは難しいところもあり、被災された方の証言なども組み込むことができたら良いと考えられる。淡路人形座では淡路人形浄瑠璃を鑑賞した。OPYには内容の正確な理解は難しかったが、３人で１つの人形を動かす方法や感情の表し方を知り、人形が本当の人間のように見えたことに感動したという表現があった。日本語が理解できなくても伝統文化を学べることを感じ、国内外問わず、多くの人に人形浄瑠璃を見てほしいという声も聞かれた。

２日目も引き続き７つのグループに分かれて活動した。

＜兵庫①＞

PYは土のミュージアムSHIDOを訪問し、淡路島で古くから活用されていた伝統建築法「土壁」について知見を広げた。土壁の歴史や性能、日本での活用事例を聞いた後は、土を原料にした大きなアートに挑戦した。人間の身長と同じ高さの大きな作品を４体作ることができた。各作品は「地球との共生」「SWYと私たち」「私たちの旅路」といったように、PYの今の心が表現されていた。みんなで１つの作品を完成させることができ、感動した。その後、ミュージアムを運営する会社が抱える課題と向き合い、土壌と何を組み合わせたら新たな観光を生み出せるのか、アイデアを出し合った。建築という視点から、自然との共生や、時代の流れの中で残すものと変えるものなど、様々な角度に視点を広げて考えることができた。

＜兵庫②＞

PYは廃校になった小学校をリノベーションしたアパレル複合施設「ei-to」を訪問した。ei-toでは、使い捨てではない循環型社会を目指し、リサイクル素材のトートバックやアートフラワーの販売だけでなく、淡路島の若手デザイナーの作品作りを後押しするためのギャラリーや工房の提供を行っている。PYは施設内の工房でチームごとにシルクスクリーンプリント体験を行った。自分たちでデザイン作りから行うことで愛着の湧く１枚を長く使うことや、ものづくりの楽しさを学んだ。ごみの削減に取り組む人々の熱意に感動し、可能性にあふれていると感じた。また、地域の特産である線香の歴史や、淡路島の人々が取り組んでいるシロチドリの保護について展示を通して理解を深めた。

＜兵庫③＞

PYは障害のある方々と一緒にたこ焼き作りと墨染めを体験した。障害者との関わりを通して、皆が幸せに生きることができる社会について考えた。また、OPYの中でも特にイスラム教徒のOPYは、今回初めてたこ焼きを食べたと話しており、彼らが感動して喜んでいる姿を見て、嬉しく感じた。グループ・ディスカッションにおいては、自分が他者とは違うことに気付いた経験の共有や、どうすれば共生社会の実現が可能かなどを話し合った。グループの中では、単に障害の有無にとどまらず、SWYの集団生活の中で感じた他者との違いに言及するグループもあった。また、共生社会の実現においては幼少期における周囲の大人の対応や、教育の必要性に言及するグループが多かった。障害の有無に関係なく、皆がより幸せに生きることができる社会の創造は難しいが、考えて行動に移していくことの大切さを感じた。

＜兵庫④＞

PYはおのころ藍に行き、藍染めを体験した。また、妙勝寺では地域活性に対する力強い気持ちが感じられ、お経がどのような世界を記しているのか、また、お経に使われる楽器にはどのような意味があるのかを学んだ。今まで気に留めていなかったことが、他のPYの視点からは特別に感じるものがあることを知り、地元や宗教の伝統を保持するために努力する人々が身近にいることを改めて感じた。

＜兵庫⑤＞

PYは陶芸と瓦の歴史について職人の話を聴講した。淡路島で作られている瓦が国内外で幅広く使われていることに驚いた。陶芸作家の価値観と生き方に触れ、外見だけを真似するのではなく、最終的に作成物として形に見えないとしても、身近なものこそ知ろうとする好奇心と、創造力を持つことが大事だと感じた。

＜兵庫⑥＞

PYは馬との触れ合いを通して生まれる幸福と、非言語コミュニケーションについて学んだ。そして、馬との非言語コミュニケーションを通して言葉の有用性と弊害について考えた。なかには馬との触れ合いが初めてというPYもいた。丘の上で馬と触れ合い、生き生きとした表情で目を輝かせているPYを見て、馬とのコミュニケーションの中で育まれる豊かさが実際にあることに気付いた。

＜兵庫⑦＞

PYはファーム・スタジオに行き、洲本市の自然を感じ

た。農家がどのように農業を営んでいるのか、また、どのように農業を広めるのか、マーケティングについての説明があった。説明後、PYは特別な肥料で育てた苺を食べ、淡路島産の野菜で弁当を盛り付けた。地元の人々が協力的で、その優しさに感動した。

最終日は淡路グローバル・ギャザリングでそれぞれのグループ活動で学んだことを共有した。まず、２日間の地域訪問活動を終えて自分の価値観に変化があったかを振り返り、他のPYと共有した。OPYからは、日本が伝統や災害の経験を次世代につなげていることを賞賛するコメントが聞かれたほか、共生社会の実現に向けて淡路市が取り組んでいることへの肯定的なコメントがあった。また、PYは自分たちが受けた印象を一単語で表し、付箋に書いて他のPYに渡した。それぞれのメッセージは、自分１人では気付くことができなかった価値観を気付かせてくれるもので、特別なものであった。最後に、一人一人、地域訪問活動前後の自身の変化について色紙に書き込み、話し合ったPYからメッセージをもらった。メッセージの中では、話し合ったことに対してのコメント返しもあり、プログラムが終わった後も兵庫県での学びを振り返る一助となるものになった。

兵庫県での３日間の活動を通じて、PYは様々な“Origin”に触れ、自分の価値観や考え方を見つめ直すことができた。JPYとOPYが共に活動したことにより、彼らが純粋に感動している瞬間に触れ、JPYは改めて日本の文化に対する誇りを感じることができた。また、淡路島の人々のエネルギッシュに自分たちの地域を良くしようとする熱意やホスピタリティに触れたことで、地域をより良くするために必要なことの１つに、コミュニティにいる人々の魅力が挙げられると改めて感じた。地域の方々、地域訪問活動をコーディネートして下さった全ての方々に感謝している。淡路島で体験したこと、考えたことを忘れずに持ち帰り、家族や友人に話して、またいつか淡路島に帰ってきたい。

3　委員会活動

委員会の趣旨

事業期間中、PYは様々な行事・活動を主体的に企画・実行した。これは、PYが異なる文化やバックグランドを持った人と共に活動を創り上げることで、主体性を育むだけではなく、相互理解を促進し、良好な関係を築くことを目的としている。活動を行うためにPYは下記の６つの委員会のうちいずれかに所属した。

1.　All-PYセミナー委員会

本委員会は、All-PYセミナーの企画、準備、当日の運営を担った。All-PYセミナーとは、全PYが参加するセミナーのことである。ほとんどの活動がグループ単位であるが、このAll-PYセミナーは唯一全PYが一同に集まる活動である。All-PYセミナーは船上プログラム中２回行われた。１回目は、アイスブレイクがテーマであった。東京プログラムではアイスブレイクやチームビルディングを行う時間が十分に取れないため、お互いを深く知ることを目的とした。一方、２回目のセミナーではリフレクションをテーマとし、PYがオンライン交流から船上プログラムまでの全日程を通しての学びを振り返ることや、事業終了後にどのような活動をしたいのかを考えることを目的とした。これら２回のセミナーにおけるテーマ以外は委員会が主体となってセミナーの内容や時間の使い方などを企画した。

2.　ディスカッション委員会

本委員会の役割は、サマリー・フォーラムの企画と運営である。サマリー・フォーラムとは、オンライン交流から対面交流までのCDでの学びと事業終了後のアクションについて、CDごとに発表する場だ。サマリー・フォーラムでは、単にCDごとの発表だけではなく、委員会のメンバーが知恵を絞り、聞き手も一体となって参加できる特別なコンテンツを企画することを期待されていた。

3.　ピア・ラーニング・セミナー（PLS）委員会

本委員会は、PLSを実施するにあたり、開催場所や開催時間の割り当て、その他セミナーの主催者に必要なサポートを行う役割を担った。PLSとは、PYが主催するセミナーで、主催者の知識や経験を少人数の参加者と共有し、議論することに重点を置いている活動である。PYは主催者か参加者としていずれかのPLSに参加した。

4.　寄港地活動委員会

本委員会は大きく分けて２つの役割を担った。１つ目は、京都府と兵庫県での地域訪問活動に向けた活動グループの調整である。京都府と兵庫県ではPYを７つのグループに分けて活動が行われた。オンライン交流期間中にグループごとに活動内容の説明がされ、PYの志向や興味関心に合わせてグループが構成された。２つ目は、高知県での地域実践活動における成果発表の企画と運営である。８日間の地域実践活動はCDごとにテーマに沿った施設

を訪問し、テーマへの理解を深めることや高知県が抱える課題を学んだ。成果発表では、それぞれの活動で学んだことを伝え、高知県が抱える課題への解決策を提案した。

5. プレス委員会

本委員会は、主に２つの役割を担った。１つ目は、PYが企画、運営を担当した活動に関する公式報告書の執筆や記事の集約である。報告書になるべく多くPYからの視点を取り入れるため、各委員会の担当者に執筆してもらい、活動の準備から実施に至るまでのプロセスや成果について述べてもらった。２つ目は、該当の委員会と協力しながらPLSやVAの宣伝のサポートをすることであった。対面交流期間中は様々な活動が同時に行われていた。活動内容を把握し、希望の活動に参加できるようにするため、船上にある掲示板などを利用しながら、参加者に伝わるための宣伝をサポートした。

6. 自主活動（VA）委員会

本委員会は、VAの開催場所や開催時間の割り当て、VAの主催者に必要なサポートを行った。VAとは、PYの自発的なアイディアにより、自由に企画し実践する活動のことで、共通の関心を持つPYまたは個人で活動を企画し行われた。PYは、主催者または参加者として自由にVAに参加できる。PLSと同様、同じ時間帯に複数の活動が行われるため、VA委員会を設け、開催場所や開催時間の調整をする役割を担った。

3.1. All-PYセミナー委員会

All-PYセミナー委員会では、２時間に渡って行われるオープニング・セミナーとクロージング・セミナーの構成を行った。委員会のメンバーは乗船前、５回に渡って行われたオンライン・ミーティングを通して、主にオープニング・セミナーの内容を考えた。オープニング・セミナーでは、PY同士がお互いを知ることを目的とした。そこで、第１回目の委員会ミーティングでは自己紹介をした後に、セミナーのアイデアを出し合った。時差によってミーティングに参加が出来ないメンバーの意見も取り入れるため、Googleフォームでアンケートを作成・集計し、各セミナーでどのような内容をどれだけの時間をかけてやるべきか決定した。また、どのアクティビティを行いたいか、担当分けについてもアンケートを行い、OPYとJPY混合のチームを作成した。それぞれのグループが各自ミーティングを行うことで内容の詳細を決めた。活動内容が決まった後、各グループがそれぞれのセクションに必要な内容を組み込めるようGoogleスライドを作成した。Canvaでスライドのデザインとフォーマットを作成し、スライドに反映させた。

オープニング・セミナー

東京プログラム中、各メンバーの自己紹介を踏まえたミーティングを行った。オープニング・セミナーのスケジュールを基に、事前のオンライン・ミーティング中に取り組んだことを小グループに分かれて発表した。２日目は、オープニング・セミナーで行う活動について具体的に決めた。その中で必要な物品と当日の発表内容を委員会のメンバー内で再確認した。東京プログラム終了後、オープニング・セミナー前に準備時間があったが、オープニング・セミナーの準備を既に全て終えていたこともあり、クロージング・セミナーのブレインストーミングを行った。

オープニング・セミナーではまず瞑想から始まり、落ち着いた音楽と共に全員でリラックスした時間を過ごした。その後はアイスブレイクのアクティビティとして、イニシャル・ゲームと名札を用い、PY同士を知るきっかけとした。このアクティビティでは、ジェスチャーしかできないため、言葉の壁で苦労していた人も無理なく参加することができた。

ビンゴゲームでは、いくつかの情報が記されたシートが配られ、PYはその特徴に合った人を見つけなければならない。PYは他者についてより一層理解が深められた。

その後、グループ全体として“this or that”というゲームを行った。このゲームでは、会場を２つに分けた後、２つの異なる選択肢を示し、PYは選択肢に応じて回答を選んだ。彼らは選んだ選択肢ごとに答えを変えた。その後、より多くのPYとつながるためのゲームを企画した。各セッションで２分間、話したことのないPYを見つけて会話をすることで、PYが新たな友好関係を築くことを目指した。続いて、10人ずつのグループを作り、３つのゲームを行った。最初のゲームでは、３つの情報の中の１つに誤情報を含め、メンバーはどれが嘘かを探し出すものである。２つ目のゲームは、自分の才能やクリエイティビティに基づいて、生き残るために何をするかが問われるゲームである。最後のゲームは、おとぎ話や映画などのワンシーンを演じ、他のPYに当ててもらうのである。オープニング・セミナーの最後には、PY全員にクロージング・セミナーで読む手紙を書いてもらった。

クロージング・セミナー

クロージング・セミナーの冒頭、All-PYセミナー委員会はアイスブレイクとして、じゃんけんや椅子取りゲームなどのゲームを企画し、実施した。その後、リフレクションの時間に移り、PY一人一人が事業の振り返りを行った。

オープニング・セミナーでは、事業が終わるまでに読むようにと自分への手紙を書いた。その手紙をクロージング・セミナーのリフレクションの時間に読み、新たに事業を終えて１年後に贈る自分への手紙を書いた。

その後、PYは各寄港地、東京プログラム、船上プログラム中それぞれで起きたことについての思い出を付箋に書き、「メモリー・ウォール」を創り上げた。

最後に、PY同士で手紙を書きプログラムでの感謝の気持ちを互いに伝え、クロージング・セミナーを終えた。

3.2. ディスカッション委員会

ディスカッション委員会は、主にサマリー・フォーラムの運営を行う委員会である。ディスカッション委員会は、オープニング・セレモニーチーム、CD発表チーム、スペシャル・イベントチーム、シンギング・チームの４つから成り立っている。乗船から本番まで、これらの４つのチームに分かれて活動を行い、サマリー・フォーラムを支えた。

オープニング・セレモニーチームでは、サマリー・フォーラムの顔となる幕開けをどう演出するかということが主な議題となり、メンバーたちは今回のPYが14か国から参加しているという点に注目し、「多様性」をキーとして活動を進めた。また、SWYに参加できたことへの感謝を表すことにも重きを置き、言葉が持つエネルギーを十分に理解しながら、開会の言葉の構成もこのチームで作成をした。

サマリー・フォーラムの主たる要素がCDごとの発表であるため、CD発表チームでは、慎重に当日の進行について議論した。各CDから貴重な学びや体験談を発表してもらうこと、円滑に会を進行することの双方を問題なく行えるように配慮した。管理部やファシリテーターと協力し、スケジュール管理や全体へのアナウンスも行った。

スペシャル・イベントチームでは、長いようで短くも感じられた、この１か月という期間の総集を行うことをテーマとし、活動した。ディスカッション委員会のメンバーのみでこのイベントを作り上げるのではなく、PYが参加できるような形でのイベントが考えられ、２つのパートに分けられた。１つ目は、トルコのイベントブースで行われた伝統芸術である「マーベリング」のインクを用いたアート作品を全PYで作成することである。２つ目は、PYから集めた思い出の写真やビデオをまとめることであった。

シンギング・チームは、サマリー・フォーラムの締めくくりとなるイベントになることから、この事業で培われた絆を言葉と音に乗せて会場が一体になれるように活動を進めた。14か国のPYが聞いたことのある曲で、今年度のSWYに馴染みのある曲を選ぶことが困難だと思われたが、幸いにもこの事業の中で度々歌われた馴染みの深い曲を選ぶことができた。また、各PYの学びや経験に触れやすくする機会を設けたいという思いから、キーとなる言葉をPYから募集し、スライドショーの作成を行った。１人残らず、全PYからの思いを受け取ることができた。

3.3. ピア・ラーニング・セミナー（PLS）委員会

ピア・ラーニング・セミナー（PLS）は、PYが主催するセミナーで、１つのPLSは60分、全４コマで行われた。全PYは、PLSの各コマにおいて、主催者あるいは参加者となる。主催者以外のPYは、当日参加したいPLSに自由に参加することができる。

PLSは、主催者自身の学習分野や経験をPYと共有し、議論する活動として、次のことを目的として実施する。

【主催者】

- 自らの考えや経験などを伝えることによりプレゼンテーション能力を高めること
- PLSの企画・立案から実施、参加者からのフィードバックまでの一連のプロセスを経験することによりプロジェクト推進能力を高めること

【参加者】

- 主催者の考えや経験などが共有され、お互いのバックグラウンドをより深く知ることができること
- 主催者の運営方法からワークショップやディスカッションの効果的な実施方法を学ぶこと

◆委員会の概要

PLS委員会はこのPLS全体を統括する委員会である。全体のスケジュール管理・運営方法について検討した。準備段階から自主活動（VA）委員会と協働し、PLSの主催を予定しているPY向けに、募集要項やフォームの作成、企画募集、備品の管理や開催場所、開催時間の調整等の企画内容の確認を行った。また、主催者とも適宜連携し、事前の打ち合わせも進めた。当日は、主催者のサポートができるように、ヘルプデスクを設けPLS開催にあたっての環境を整え、セミナーの準備や補助を行った。今年度は、合計23のセミナーが開催された。

◆PLS企画例　詳細

《テーマ1》

「わたしたちはどう生きるか？どう死ぬか？」

《企画経緯・目的》

私たちは医療現場で多くの死に遭遇してきた。死は誰にでも起こりうることであるが、それらに関することはタブー視され、避けられる傾向にある。そのため、いざ死が間近になった時に、自分自身や周りの大切な人の価値観や思いについて分からず、困惑するケースも少なくない。自分らしく最後まで生きるとはどういうことであるか？ 死を想像し、考えるということは、私たちがどのように生きるのか考えることにつながるのではないかと考えている。参加者が「生」や「死」について、改めて自分自身に問いかけ、生きる上で大切にしている価値観や思いについて考えるきっかけとなることを目的に企画した。

《内容》

日本における死の一般的な考え方／医療現場の現状を伝えた。参加者に質問を投げかけ、自身を振り返る機会を設けた。少人数のグループで自身の考えや思いについて共有してもらった後、任意で全体にも共有してもらった。企画終了後に、参加者以外にも目に止めてもらい、考えてもらうよう、掲示板にディスカッション・ポスターを掲載した。

質問の詳細としては、以下の通りである。

1. 死は、あなたにとってどんなイメージか？終わり？始まり？どうしてそう思うか？
2. ３時間後に死ぬとしたら、この残りの時間、あなたはどう過ごしたいか？何をしたいか？

《評価》

センシティブなテーマであり、参加者の経験などにより受け取り方や反応は様々であった。ただ企画選択は参加者に委ねられていたことは良かったと思われる。

また、参加者自身が個々の人生や価値観、思いについて考える機会になったと振り返った。参加者からは「身近に死を感じる機会がない日常で、いつかは予測できなくとも誰にでも死が訪れることを理解しながら、どこかで私自身の死に関して遠ざけていたので、改めて自分の死に向き合う時間はとても貴重なものであった」という意見が挙がった。

《テーマ2》

トルコの UCAV の歴史

《企画経緯・目的》

無人戦闘航空機 (UCAV) の開発は、現代の軍事・防衛戦略の進化における重要なマイルストーンとなっている。近年、トルコはこれらの最先端技術の設計、開発、運用展開において主導的な国家として台頭してきた。このPLSでは、この分野へのバイカル (Baykar) の貢献に特に焦点を当て、トルコのUCAVの歴史的進歩、技術革新、重要な成果を掘り下げる。この研究は、地球規模での無人航空機システム (UAS) の進歩におけるトルコの役割を包括的に理解することを目的としている。

《内容》

このセッションで伝えたい主な内容は以下の通りである。

- 発展の年代記：トルコの UCAV の歴史的年表を概説し、その始まりから現在の状態を辿る。
- イノベーションのハイライト：トルコによって導入された技術的なイノベーションを詳しく説明する。
- 成果の評価: 国防と国際舞台の両方におけるトルコの UCAV の応用に焦点を当て、トルコの UCAV の影響と成果を評価する。
- トルコの技術的野心の明示: イベントと関連活動を通して、テクノロジーとイノベーションにおけるトルコのより広範な野心を探求でき、これはTEKNOFESTでの卓越性によって例証される。

またセッションの概要は以下の通りである。

1. トルコのUCAVの歴史的進化
   - 初期の開発と概念化
   - 技術進歩のマイルストーン
   - バイカルにおける重要な役割
2. 技術革新とブレークスルー
   - 設計とエンジニアリングの革新
   - 運用能力と機能強化
   - 国防システムとの統合
3. 成果と世界的な影響
   - 国家安全保障と防衛への貢献
   - 国際協力と輸出の成功
   - 世界の防衛コミュニティでの評価
4. 文化的及び技術的背景: TEKNOFEST
   - TEKNOFESTの概要と目的
   - トルコの技術イメージの促進における UCAV の役割
   - 青少年への教育的、インスピレーション的な影響

《評価》

トルコの UCAV の歴史と影響の評価は、いくつかの基準に基づいている。

- 技術力: トルコの UCAV で開発及び実装された高度な技術の評価
- 運用効率: 様々な運用シナリオにおけるトルコの UCAV の有効性の分析
- 国家及び世界の安全保障への貢献: トルコの防衛能力強化におけるトルコの UCAV の役割と世界の安全保障力学への貢献の評価

トルコの UCAV は、イノベーション、テクノロジー、戦略的先見性が見事に統合されたものである。バイカル

は他の貢献者らとともに、トルコをUAS開発の最前線に位置づけ、先進技術の分野で国家の野心と能力を体現する。トルコの UCAV の歴史的進化、成果、技術革新は、世界の防衛産業におけるトルコの名声の高まりを強調している。さらに、TEKNOFEST のようなイベントは、トルコの技術進歩を紹介し、次世代の革新者や思想家にインスピレーションを与える上で重要な役割を果たしている。

◆PLS委員からのコメント

PLSは、PYによって企画され、参加した全員が知識を共有し、異文化理解を深めるためのすばらしい場となった。どのトピックも非常にユニークで、さらに探求したくなるような興味深いものであった。例えば、ニュージーランド・デリゲーションのPLS「ニュージーランド先住民（マオリ族）の歌と踊り」では、参加者全員が一緒に歌を歌って踊った。自分たちと異なる文化を知ることで、出身国に関係なく私たちの距離が縮まった。また、メキシコPYによる「ジェンダー・セクシュアリティの多様性と交差性」というPLSでは、自分たちの最も深い部分や本当の色を共有することで、皆が１つになれたと感じる場となった。PLSは今年の事業の精神を象徴し、グローバルな若者の対話と協力を促す、とても良い場所となった。

[PLS一覧]

主催者	PLS 名	内容
（日本）	海外で留学、仕事をすること	南アフリカでの留学経験とアメリカでの就業経験を共有した。
（日本）	広告におけるジェンダー表現	人々のジェンダー意識がメディアにどのように反映されているのかを学んだ。
（日本）	あなたの理想的な宿泊と旅行は？	人々が旅行に求める価値の要素を見つけた。
（日本） （メキシコ）	SWY35 EXPO	プレゼンテーションやブースを通して、各国の多様な文化を紹介した。
（メキシコ）	うつ病や不安障害について	日々の生活における不安障害とうつ病について理解し、学んだ。
（日本）	SWY よさこいチーム	高知県のよさこいの歴史について学び、踊った。
（日本）	持続可能な食	日本の特産品を食し、持続可能な食について考えた。
（メキシコ）	メキシコにおける死について	各国の PY が抱く「死」のビジョンについて議論し、メキシコの死者の日について紹介した。
（トルコ）	自己防衛について	自己防衛とは何か、どうすれば窮地を脱することができるかを教えた。
（日本）	Attractive Japan 47	プレゼンテーションやブースを通して、日本のユニークで魅力的なものを紹介した。
（アルゼンチン）	万人のための教育： アルゼンチンにおける大学の公的コミットメント	アルゼンチンの大学制度について説明し、世界の様々な大学制度について PY と議論した。
（トルコ）	イスラームの建築	PY に聖地を身近に感じてもらい、異文化への理解を深めた。
（ニュージーランド）	ニュージーランド先住民（マオリ）の聖歌と歌	PY と一緒にニュージーランドの伝統的な文化である聖歌や歌を共有した。
（日本）	宗教について学ぼう！ あなた・あなたの国にとって宗教とは？	各国の宗教の事情を知り、宗教観に関する対話を通して、互いの価値観を深く理解した。
（日本）	私たちはどう生きるか？どう死ぬか？	PY に自身の生と死について考え、人生で最も大切なものは何かを考えた。

主催者	PLS 名	内容
（日本）	トレーディングゲーム - 不公平について考えよう -	貿易を中心とした世界経済の基本構造を理解し、南北格差や環境問題を解決するために国際協力はどうあるべきか、一人一人が何をすべきかを考えた。
（トルコ）	トルコの UCAV の歴史について	イノベーション、テクノロジー、無人航空機に関心のある PY 向けに、トルコの世界的に有名な航空機を紹介した。
（日本）	Silent Witnesses	1945 年８月６日に広島に投下された原爆に関する体験や事柄について発表し、対話した。
（日本）	ワークライフバランスのセミナー	仕事と子育てのバランスについて議論し、キャリアと子育てに関する PY の悩みや懸念を共有した。
（日本）	SWY 日本語クラブ	OPY が日本人とコミュニケーションを取ることを手助けできるように、基本的な日本語を教えた。
（日本）	東北と石川県での震災の被害と現地視察の報告	東日本大震災から学んだ、災害後の生活と命を守るヒントを共有し、災害支援とは何かを議論した。
（メキシコ）	テワカンの声：メキシコの自然保護区の住民の意見について	生物保護に関する一般的な意見の学術的な影響と人々が地球に対してどのような責任を負っているのかを議論した。
（メキシコ）	ジェンダー・セクシュアリティの多様性と交差性	ジェンダー・セクシュアリティの多様性と交差性について議論し、考察した。

3.4. 寄港地活動委員会

寄港地活動委員会の目的は、学ぶ意欲を促進し、地域の良さを再発見すること、寄港地が抱える問題意識を高めることである。寄港地活動委員会は、寄港地である京都府、兵庫県、高知県の３つの担当グループに分かれ、それぞれ委員会活動を進めた。

京都グループ

京都グループの目的は、寄港地での活動を有意義なものにするためのグループ分けや寄港地に関する理解を深めるプレゼンテーションを行うことだった。京都府ではPYが７つのグループに分かれて行動するため、対面交流が始まる前に人数の振り分けを行った。なるべく多くのPYの希望を聞きつつ、受け入れ先の収容人数、また各グループに必ず各国のPYが入るように配慮した。

乗船後、有意義な活動ができるように公式プログラムも含めてミーティングを２回行った。OPYとJPYが対面した初めての機会だったため、自己紹介を行い、互いについて知ることから始めた。このミーティングによって委員会のメンバー間の関係性を築き、自分たちのアイデアや意見を自由に言える環境を作ることができた。

乗船後の活動では、寄港地を訪れる前日に、寄港地の京都府に関するプレゼンテーションを行った。内容は折り紙、寄港地に関する情報、クイズの３部構成であった。

プレゼンテーションの最初に、アイスブレイクとして折り紙で兜を作成した。PYの中には、折り紙を折るのに苦戦している者もいたが、助け合いつつ、一緒に折りながら交流を深めることができた。京都府での寄港地活動に向けたプレゼンテーションでは、多くの人に知られている有名な市街地ではなく、海や森に囲まれたあまり知られていない市町について紹介した。加えて、寄港地活動で紹介された内容を覚えてもらうために、委員会は選択式のクイズを作成し、PYがクイズを解いて参加するゲーム形式のプレゼンテーションを行い、大いに楽しんだ。

PYは多種多様なバックグラウンドを持った人が集まっているため、プレゼンテーションの作成において様々な意見が飛び交う環境が見受けられた。そのため、それぞれの案を１つのプレゼンテーションにまとめることに多くの時間を費やした。この経験から、お互いの価値観や

意見を尊重しながら内容を決めていくことの難しさを学んだ。

主な共通言語は英語であったため、言葉に苦戦しているPYもいた。文化の違いに戸惑いながらもお互いの価値観や意見の違いを尊重しながら寄港地活動の準備を行った。

兵庫グループ

京都グループと同様、兵庫県での寄港地活動でも７つのグループに分かれて活動を行うため、対面交流が始まる前にグループの振り分けをした。

また、兵庫県に寄港する前日に準備活動として淡路島に関するプレゼンテーションを行う役割があった。12月に委員会のメンバーで集まり、プレゼンテーションの内容を話し合った。さらに、対面交流がスタートしてからの委員会活動やミーティングの時間に内容を確定させ、クイズと委員会で考えたオリジナルの「トルネードゲーム」を行うことを決定した。クイズは淡路島に関する内容で１人１問作成し、全員で話し合った。その後、各自担当のクイズのスライドを作成した。また、「トルネードゲーム」は、鳴子の渦巻きをイメージし、クイズのためのグループを作成することにした。

プレゼンテーションを行った寄港の前日、会場には、PYが自ら動くことで渦巻きができ、LGやCDとは異なる、別のグループでクイズを行うことで、新しい人と会話するきっかけを作ることもできた。発表の最後には、淡路島の動画を流し、翌日から始まる寄港地活動のイメージを膨らませることができた。

高知グループ

高知県への理解を深めるため、PY向けにプレゼンテーションの作成、寄港地準備時間の運営、地元の人々を船内に招いて行うイベント（ハローSWY）の準備・運営、高知県でのプログラム成果発表会の準備・運営など、様々な活動を実施した。

特にハローSWYと成果発表会では、寄港地活動委員会が大きな役割を果たした。ハローSWYには、高知県や高知市の職員、実行委員、地元の幼稚園児、小中高生等も参加し、船内ツアーと各国の文化発表を行い、地元の方々に楽しんでもらえるよう工夫を凝らした。ハローSWYでは、各国約３分間のプレゼンテーションと13名の代表PYがよさこいを披露した。プレゼンテーションは、全員に理解してもらえるように、ダンスや映像などで自国の文化を紹介した。

成果発表会は、８日間の活動成果を発表する場として開かれた。各CDがテーマに即して、高知県で得た学びを発表した。SWYの名に相応しい準備を心がけ、ご協力いただいた高知県の皆様に感謝を伝えるため、寄港地活動委員会一同で力を尽くした。

3.5. プレス委員会

プレス委員会では主に、船上プログラム前の自主活動期間中及び船上プログラム中に、PY主催で行われる活動に関する情報発信のガイドラインを考案し、PY間で円滑かつ正確な情報が共有されるよう、活動を進めた。

JPYの事前研修から11月のオンライン交流が開始されるまでの期間は、JPYが中心となって、船上プログラム開始までに開催されるオンライン自主企画の情報発信のルールを策定した。また、船上プログラムに向けて、船内で実施するPLSやVAの宣伝方法や、船内の掲示版に掲載可能な掲示物の規格、掲示版の利用方法、プレス委員会での掲示物の確認方法など、JPYが中心となって詳細を話し合った。船上で必要となる備品の調達も併せて行った。

加えて、プレス委員会にて、今年度のPYを対象としたインスタグラム・アカウントを立ち上げた。各国のPYとも協力しながら、カウントダウン企画を実施し、船上プログラムに向け、オンラインでPY同士をつなぐきっかけとなった。

船上プログラムが開始されてからは、プレス委員会の中でアナウンス担当、掲示版担当、報告レポート担当、インスタグラム担当の4チームに分かれ、OPYと共に活動計画を話し合い、実際に活動した。船内は電波がほとんど無い特殊な環境で、SNSを使った宣伝には制限があったため、主にアナウンスと掲示版を駆使し、試行錯誤を繰り返しながら進めた。また、プレス委員会で決めたルールに沿ってPYアナウンスの実施を試みたところ、時間の制限や突発的に必要なアナウンスが予想外に多かったことから、途中でルールを見直した。

プログラムが進むにつれ、報告レポート担当のチームは他の委員会のメンバーへ活動についてまとめ、レポートを書くように依頼した。また、定期的に進捗を確認したり、報告書が期限内に提出されるように各委員会のサポートも行った。

全体を振り返って、プレス委員会としてOPYとJPYがお互いに協力し合い、臨機応変に進めることが出来た点は、すばらしいチームワークだったと思う。

今後は、インスタグラム担当が中心となって、今年のプログラムが色褪せないように、事後の思い出の共有なども行っていく予定である。

3.6. 自主活動（VA）委員会

自主活動（VA）委員会は、VAの開催場所や時間の割り当て、VAの主催者に必要なサポートを行った。

VAは、対面交流期間中に東京プログラムと船上プログラムの両方で開催された。VAは企画・運営の全てがPYによって行われ、それらの活動を通してPY相互の理解と親交を深め、学びあう。

今年は世界の文化について学び、楽しむことを共通テーマとし、非常に多様な活動が行われた。PYは音楽、芸術、歴史、トリビアなどを学び、参加国の食べ物を試食する機会もあった。VA委員会はPYの経験と交流を促す上で非常に重要な役割を果たした。様々な活動を組織し、文化交流を促進、世界における多様性の豊かさを称賛する包括的な環境を作り出す責任があった。

委員会の第１の目標は、単に楽しむためのVAを実施するだけではなく、様々な活動を集約し、実行できる環境を作ることである。VAはPY間の有意義なつながりを促進し、異なる文化について学び、自国の伝統を共有し、グローバルな視点を育てる機会を提供することを目的としている。PYが学びを追求できるだけでなく、国境を越えた永続的な関係形成を確実にすることで、委員会はこの交流事業成功の原動力となった。

交流事業におけるイベント企画は、文化的感受性、創造性、ロジスティックな感覚のバランスを必要とする。委員会は、異なる国からなるPYの様々な背景、関心、嗜好を考慮する必要があった。多様な活動を組み合わせることで、多様な趣味に合わせ、誰もが参加できる環境づくりを目指した。

文化交流は委員会の役割の中心となるものであった。国際的なフードフェスティバル、伝統的なダンスの披露、言語交流プログラム、対話型のワークショップなどのイベントを通じて、PYが仲間の豊かな多様性に触れる機会となった。これらの経験は、文化的視野を広げるだけでなく、相互理解を深め、固定観念を打破し、国家間の架け橋となった。

委員会は、PY間のコラボレーションと協力を促す役割を果たしている。チームビルディングの活動や、グループ・プロジェクト、PYが共同で取り組む活動がプログラムに組み込まれ、相互作用を促進し、絆を形成した。これらの活動は、PYの対人能力を高めるだけでなく、異なる背景を持つ個々人が共通の目標に向けて協力できるコミュニティの構築にも貢献している。

文化的な豊かさに加えて、委員会は個人と専門性の成長に焦点を当てている。リーダーシップ、コミュニケーション能力、グローバルな問題などのトピックを扱うワークショップやセミナーもVAで扱った。様々な分野の専門知識を持ったPYがイベントを主催することによって教育的側面も加わり、従来の教室での学習環境を超える洞察力を養うことができた。このように全体論的な発展を重視することで、参加者は学術的な知識を得るだけでなく、グローバル化した世界において非常に貴重な実践的スキルを習得することができた。

柔軟性と適応性は、委員会の重要な特性である。多様な価値観を持った人が集まり、日々変わりゆく環境の中で、委員会メンバーは参加者からのフィードバックや予期せぬ事態、アップデートされる内容に基づいて計画を調整する必要があった。そのため、フィードバックセッションや参加者調査などの定期的なコミュニケーションチャネルを設け、変わりゆくニーズと期待に常に対応できるようにした。

委員会はまた、PYの感情的なウェルビーイングを満たすために重要な役割を果たした。家を離れて新しい文化環境の中を進むことは困難であるかもしれない。そのため、委員会はウェルネス、マインドフルネス、ストレス解消を促進する活動を行った。カウンセリングやPY同志でメンター制度を導入するなどのサポート体制を設けたことで、PYのメンタルサポートに必要なリソースを確保した。

帰属意識の醸成は委員会にとって重要な焦点だ。PY間の相互作用を促進するために、ソーシャルイベント、ネットワーキングの機会、非公式な集まりが催された。委員会は一体感を高めることで、家族と離れても個人が仲間のPYに支えられ、大切にされ、つながっていると感じられるホームの創造に貢献した。

委員会の成功は、効果的なコミュニケーションと協力にかかっている。定期的な会議を通して、PY全員が共通認識を持って活動に取り組んでいるということを確認することができた。ニュースレター、ソーシャルメディア・グループ、オンライン・フォーラムなどの透明性のあるコミュニケーションチャネルは、継続的に参加者に今後の予定について情報を伝えたり、自分たちの考えや経験を共有するプラットフォームを提供したりすることができた。

最終的に、多国籍交流プログラムにおけるVA委員会は、多様な価値観を持つ個人の集まりを、１つのつながりのあるコミュニティに変える重要な役割を果たした。時間をかけたイベントの企画、文化交流、そして個人の成長や仕事面での成長に焦点を当てたことで、PYにとって夢中になれる豊かな活動を提供することができた。人とのつながりを強くし、文化の壁を越え、全体的な成長を促すことで、国境を越え、PYに永続的に影響を与える活動となるよう、VA委員会は重要な役割を果たした。

各VAが記載された書面を共有し、そこに書かれている全ての活動が適切に行われているかを確認することが、

委員会の役割だった。また、各VAに少なくとも委員会のメンバー２人を配置した。活動の中で様々な要望が出ていたために、委員会の確認をすり抜け、適切な連絡チャンネルを使わずに活動が行われたこともあった。公式プログラムでのVAは前半で終了したが、その後も様々な活動が行われた。幸いなことに、大きな懸念事項は船内活動中のVAで生じることはなく、多少の懸念事項はVAが始まる前に解決することができた。

特に印象的だったイベントは、メキシカンナイトである。メキシコのPYが参加希望者に向けてパーティーを開催した。メキシコのスナック、音楽、彼らのお気に入りの飲み物やサルサの試飲、メキシコのダンス、そしてLucha Libreのパフォーマンスもあった。会場はとても盛り上がり、大成功で幕を閉じた。

もう１つの目玉は、アイルランドの「パブ・クイズ」だった。アイルランドのPYは船内のスペースを地元のパブに一変させ、大勢の参加者をもてなした。様々なデリゲーションのPYが集まるチームを構成し、テーブルには様々なスナック（アイルランド人が呼ぶ「パブ・グラブ」）が並べられ、アイルランドの伝統的な飲み物も試飲した。クイズは、音楽から歴史、そしてスラングまでアイルランドについて多くのことを網羅した内容だった。

上記は数あるVAの中のほんの一部に過ぎないが、どのVAも価値観を広げ、自分の周りの世界について学び、心から楽しめる機会を創出した。

[VA一覧]

主催者代表者	VA のテーマ	内容
（日本）	瞑想とアート	音楽を流しながら身体を動かし、瞑想し、感じたことを描くワークショップを開催した。
（トルコ）	トルコ語クラブ	トルコ語に興味を持っている PY にトルコ語を教えた。
（日本）	世界の飲み物の旅	各国で飲まれる飲料の紹介と試飲を通して、各国の食文化への理解を深める体験型のイベントを開催した。
（アルゼンチン）	アルゼンチンの食のツアー	アルゼンチンの様々な郷土料理（クヨ、パンパ、リトラル、北西アルゼンチン、パタゴニア）を紹介した。アルゼンチンのユニークな味を紹介し、アルゼンチン料理を探求してもらった。
（日本）	船上相撲トーナメント	相撲について簡単に紹介し、16 人のプレイヤーがトーナメント形式で勝負した。
（アルゼンチン）	“¿Qué mirá’, bobo?” – 究極のアルゼンチンジェスチャーゲーム	ジェスチャーが表す意味を当てるクイズを行い、アルゼンチンの非言語コミュニケーションの面白さを紹介した。
（日本）	日本太鼓教室	「海鳴」を披露し、OPY に太鼓の叩き方を教えた。
（日本）	ミュージックフェスティバル	クラシックな楽器やバンド、コーラスと一緒に音楽を奏でた。
（トルコ）	過去のこだま：伝統的なアートのワークショップ	トルコのマーブリングアートと木版画のワークショップを開催し、トルコの伝統芸術を紹介した。また PY も芸術を体験し、作品作りを行った。
（日本）	レッツダンス	参加者は３曲で構成される６分間のダンスを作り、披露した。発表の前にオーディエンスにダンスを教え、３曲目は全員で一緒に踊った。
（日本）	ソーラン節	JPY がソーラン節を披露し、その後 OPY に教えた。
（アルゼンチン）	アルゼンチンのゲーム	様々なアルゼンチンのカードゲームを紹介した。
（メキシコ）	メキシカンナイト	メキシコのパーティーやカーニバルの伝統的な要素を融合した。例：ディスコ／ DJ スタンド、ダンスなど
（ヨルダン）	トレジャーハント	各国の文化からクイズを作り、ヒントとなる紙と物と一緒に船内の各所に隠した。参加者は上位３人に入るように取り組んだ。
（日本）	日本祭り	日本の伝統を紹介するため、空手やオタ芸、太鼓などを披露した。また、書道や茶道を体験した。

主催者代表者	VA のテーマ	内容
（フランス）	Chandeleur / クレープパーティ	クレープデー（chandeleur）にみんなでクレープを食べた。
（アルゼンチン）	スペイン語を学ぼう “Lunfardo”	Lunfardo というアルゼンチンで使われるスラングを教えた。同じスペイン語でもメキシコとアルゼンチンで違う言い回しがあることを教えた。
（アイルランド）	Irish Pub Quiz	船内をアイルランドのパブにし、チーム対抗のクイズに参加しながらスナックや飲み物を楽しんだ。クイズではアイルランドの音楽、歴史、スラングなどを取り上げた。
（トルコ）	Echos of the Past_ アナトリアン・ロック・ナイト	トルコのロックを演奏、民族ダンスを踊り、最後は参加者と一緒に歌った。
（日本）	Attractive Japan 47	日本の各都道府県に関する紹介をした。また、日本に関するプレゼンテーションを行った。
（ヨルダン）	伝統的なダンス	ヨルダンの伝統的なダンスである Dabke について、バックグラウンドや踊りを教えた。

4 内閣総理大臣メッセージ

内閣総理大臣の岸田文雄です。「世界青年の船」事業に参加される各国代表の皆さん、ようこそいらっしゃいました。来日を心から歓迎いたします。

「世界青年の船」事業は、多様なバックグラウンドを持つ青年が参加し、ディスカッション等を通じて、異文化対応力やコミュニケーション力を高めるとともに、国際化や多様化の進展する各分野において、リーダーシップを発揮して社会貢献を行うことが出来る青年を育成すること等を目的としています。これまで、数多くの青年が参加し、その経験を礎に世界中の様々な分野で大いに活躍されています。

皆さんは、約１か月間、船の上という特別な環境の中で共同生活を行いながら、日本の各地に寄港し、地元青年との交流や文化体験等を通じて地域の魅力を味わうとともに、地域が実際に抱える課題の解決について、大いに頭を悩ませ、熱く議論を交わされてきたことと思います。

異なる歴史・文化・価値観を持つ多くの仲間と共に過ごし、意見を交わす中で、多くのことを学ばれたのではないでしょうか。こうした経験は、皆さんが、将来、リーダーとしてそれぞれの国や地域で活躍する場面においても、かけがえのない財産になるものです。

皆さんが、本事業での経験を糧に、日本とそれぞれの国との架け橋として、また、参加しているそれぞれの国同士の架け橋として、大いに活躍されることを期待いたしまして、私の挨拶といたします。

令和６年２月20日
表敬訪問
内閣総理大臣官邸にて